

記 録

拓殖大学・南洋語（インドネシア語等）及び
南洋（東南アジア）研究の系譜

井 上 治
坪 内 隆 彦

目 次

- 一 拓殖大学の特色——台湾協会・東洋協会と南洋世界
国内最初のマレー語教育
南進の基地・台湾
東洋協会と南洋協会
東洋協会の南洋重視
興亜と南洋
独自の植民論
井上雅二の興亜と南進
- 二 教育スタッフの変遷と学風
石原廣一郎の支援
日本の南方政策
安南語講習所
敗戦による変化
マレー語教育創成期
別所直尋と上原訓蔵
宇治武夫と戦時のマレー語
オランダ語教育

興亜論と南洋事情

大川塾

満川龜太郎と別所直尋

木村増太郎と南洋貿易

東郷 實と植民政策

岡本精一と飯泉良三

南方大學講座

南洋語教育の続行

末永 晃による復興

インドネシア賠償研修生の受け入れ

プラナジャヤ

国際開発学部

南洋研究の続行

海外高専構想における途上国としての東南アジア

坂田善三郎の東南アジア研究

石橋重雄のインドネシア研究

三 学生の研究活動

南洋研究会の設立

南洋研究の成果

南洋への渡航

戦後の課外活動・啓蒙活動

おわりに―海外雄飛の教育体制

一 拓殖大学の特色

―台湾協会・東洋協会と南洋世界

国内最初のマレー語教育

拓殖大学は、明治四〇（一九〇七）年九月に日本の大学で初めてマレー語（当時は馬來語と表記する場合が多かった）教育を導入した。^①一般には、拓殖大学、東京外国語大学（当時東京外国語学校、以下東京外大）、大阪外国語大学（当時大阪外国語学校、以下大阪外大）、天理大学の四大学がインドネシア・マレーシア語教育の老舗といわれるが、東京外大がマレー語教育を開始したのは拓殖大学の一年後の明治四一（一九〇八）年、^②大阪外語は一四年後の大正一〇（一九二一）年、天理大学（当時、天理外国語学校）は一八年後の大正一四（一九二五）年である。^③

しかも、マレー語とともに南洋事情の講座が早い時期に設けられ、南洋地域で活躍できる人材を輩出した。昭和一七（一九四二）年八月に拓殖大学が東洋協会などとともに設置した南方大学講座は、南洋雄飛の人材育成という観点で、国内の最高水準にあったと考えられる。

こうした、拓殖大学の南洋語（インドネシア語等）及び南洋（東南アジア）研究の先駆性とその独自の学風は、建学の精神と、母体である台湾協会・東洋協会の性格による。

「専ら新領土經營に要する往邁敢爲の人材を養成し彼我の交情を潤和便安ならしめ以て殖産興業の發展を裨補し聊か臺灣の將來に貢獻する所あらんを期す」⁽⁴⁾との趣意で誕生した拓殖大学（台湾協会学校）には、海外雄飛、現地主義、開拓精神といった伝統が脈々と受け継がれてきた。この伝統の中で、拓殖大学には早い時期から南洋重視の姿勢が見られた。そして、興亜の理念が常に意識され、南洋への雄飛の強い動機づけができていた。

つまり、拓殖大学の南洋研究の先駆性と独自性は、建学の精神と興亜論によって支えられていたのである。

南進の基地・台湾

明治期においても、社会一般の南洋への関心が高まった時期がある。明治二〇（一八八七）年から明治二五（一八九二）年頃には、南洋を扱った政治小説が続けて刊行されている。後藤南翠『旭日旗』、小宮山天香『冒険企業・聯島大王』、東海散士『南洋の佳人』、矢野龍溪（矢野文雄）『浮城物語』、末広鉄腸

『南洋の大波乱』などである。ところが、日清戦争（明治二七年七月～二八年四月）の前後から、朝鮮半島、中国への関心が強まり、南洋への関心は薄れていく。

これに対して、台湾協会・東洋協会は南洋への関心を持続した。当時台湾は、我が国の「南進の基地」と呼ばれていた。その主唱者にして実践者こそ、台湾協会学校（拓殖大学）初代校長、桂太郎公であったようにも見える。

台湾協会学校設立に先立つ四年前の明治二九（一八九六）年七月、第二代総督の立場にあった桂は伊藤博文に送った書簡で、台湾領有の意義は南清および南洋に「羽翼ヲ伸張スルニ適宜ノ地位を占メ」たことだと書いている。⁽⁵⁾

明治三三（一九〇〇）年の台湾協会学校の設立目的も、桂初代校長の台湾重視の南進論とは切り離せない。「臺灣を我領土に皈せしめてより、我國の亞細亞大陸に對する形勢一變し、茲に始めて亞州大陸の中服に臨み、北『サガレン』に起りて、南澎湖列島に至る一帯の海洋、我國の掌中に皈したるが爲め、恰も日本海を南方一千哩延長したるの實を呈し、始めて東洋の英國たる眞地位を占むるに至れり、此に於てか、我國の位地は亦北方に偏せず、南後印度を望むべく、北『シベリヤ』を指すべく、『フィリッピン』指顧の間に標渺として亞州大陸目睫に逼

るに至れり、實に日清の戦役は、我國をして亞州の喉に據らしめらる者といふべし」(『台湾所感』⁽⁶⁾)という桂の発想には、明らかに地政学的な認識が見られた。

大正二(一九一三)年四月二六日の入学式で当時の小松原英太郎校長は、「本校は所定の学科を卒えたる後、わが新領土または支那其他南洋諸島に出で、各種の業務に従事すべき確乎たる志操を有する者に、特殊の教育を与え国家の為殖民的事業に向かつて奮闘する人材を養成するに在る。故に本校に入る者は、最初より海外に出で、奮闘するの決心なかる可からざることは無論のことである」と訓示している。この訓示の直後、東洋協會は南洋通信としてシンガポールをはじめとする南洋事情を伝えていく方針を打ち出している⁽⁷⁾。

後述する通り、国内全体の南洋に対する関心は国際情勢次第で大きく変動したが、台湾協会・東洋協會は一貫して南洋への関心を持続していた。

我が国における初期の南洋研究を主導したのは、台湾総督府であった。特に官房調査課は早い時期から南洋研究を開始し、それらの業績は『南支及南洋調査書』にまとめられた。官房調査課の蔵書は昭和一七(一九四二)年一月末現在で四万二八〇〇冊に及んでいたともいう⁽⁸⁾。

『南支那及南洋調査』にまとめられたものとして、大正五(一九一六)年には「瓜哇に於ける本邦品取引状況」、「佛領印度支那事情」などが、大正六(一九一七)年には「英領北ボルネオ並ニ馬來半島調査報告書」、「南洋ニ於ケル邦人ノ企業」などが、大正七(一九一八)年には「南洋ニ於ケル福建、広東兩省移民ノ活況」、「菲律賓ニ於ケル教育ノ現況」などがある。戦前拓殖大学で植民政策(南洋事情)を担当した東郷實は、この官房調査課の課長を務めていた。

東洋協会と南洋協会

明治四五(一九一二)年には、台湾総督府民政局長内田嘉吉が「南洋懇談会」を発足させた。そして、内田らは翌大正二(一九一三)年に「南洋協会」を設立している。ただ、このときは資金難ですぐに解散を余儀なくされた。

だが、環境はまもなく変わった。第一次世界大戦の勃発に伴い、ドイツ保護領だった南洋群島(マリアナ、カロリン、マーシャル)を日本が占領し、大正三(一九一四)年一〇月以降軍政を布くことになった。明治三九(一九〇六)年頃から南洋熱を駆り立ててきた『実業之日本』などが、大正四(一九一五)年にはさらに南洋ブームに火をつける役割を果たした。こうし

て南洋への関心が急速に高まるのに合わせ、内田は小川平吉らと協議して、再び南洋協会（本部…東京）を結成したのである。^⑨南洋協会趣旨は次のように謳っている。

「南洋諸島の広大なる爪哇、スマトラ、ボルネオ、セレベス、馬來半島、比律賓群島のみを以てするも凡そ一百万方哩にして、無尺蔵の宝庫は世界民族の開発を待つあり、殊に我邦と南洋とは地理的及歴史的に於て將た経済的に於て最も親密なる干繁を有し、巨額の資本労力は現に注入せられ将来益々発展の域に進まんとす。

本会は汎く南洋の事情を研究して其の開発に努め、以て彼我民族の福利を増進し聊か世界の文明に貢献せんと欲す、想ふに南洋諸島に対する我国民の智識及觀念は猶極めて穉弱にして、遠隔せる欧米諸国民の其れにだれも及ばず、彼の南洋人士の我国に対する所も亦此に此の如くなるべし。

今日に至るまで南洋に関する学術的社交的若しくは経済的の聯絡を欠き、単に個人起業者の施為に一任して顧みざるは洵に遺憾とせし所なり、幸に本会の創立に依て此欠陥を補ひ、彼我の経済的發展を完ふし、併せて親密なる交誼を進むる得ば、独り国家の利益たるのみならず亦以て世界民族の慶福た

らずんばあらず。大方の君子希くば賛襄を吝むこと勿れ」^⑩。

南洋協会は、大正六（一九一七）年五月に調査編纂部を設置し、南洋主要地域に調査囑託を常置した。^⑪こうして、南洋調査・研究を主導していくことになる。

これより先、大正四（一九一五）年八月二日には南洋協会台湾支部が設立されている。支部長に就いたのは、台湾総督府民政局長下村宏（六代学長。昭和二〇年十一月～二十一年二月）である。^⑫東洋協会専門学校が東洋協会植民専門学校と改称されたのは、南洋協会台湾支部設立の一週間後の大正四（一九一五）年八月九日のことである。この改称によって、東洋協会専門学校時代の学則第一条「本校ハ台湾清国及韓国ニ於テ公私ノ業務ニ従事スルニ必要ナル學術ヲ授クルヲ以テ目的トス」の前半が「本校ハ台湾朝鮮及支那其他南洋ニ於テ」と変更され、「南洋」が初めて謳われることになった。ここにおいて、東洋協会と南洋協会が台湾で交差することになった。

両協会は、ともに台湾を拠点として南洋重視の姿勢をとるところで共通していたわけである。南洋協会関西支部発会式での田艇吉（台湾総督を経て東洋協会評議員を務めた田健治郎の兄）会頭の挨拶には、南洋協会が台湾協会・東洋協会をモデルとし

て設立された経緯が示されている。

「顧るに南洋協會の沿革を知らんとせば、日清戦後臺灣を占領し後民間活動を援助するの機關を設立し之を援助する爲に臺灣協會の設立を見たに起因する。同協會は其地域を擴張して、其後朝鮮安東等を入るゝに及び、東洋全部の關係する處あるを以て東洋協會となり、臺灣、支那、滿洲、朝鮮及西比利亞に迄關係ある事業を世話する様になつた。此の協會事業の關係する處は政府施設とせば角立ち、又民間事業のみとしては不便であるが故に、別に半官半民的施設とし政府と實業家との間に於て、先の東洋協會の如きものを南洋に設立するの要を感じ、全國に於ける知名の士を集めて此南洋協會が出来たのである」¹³⁾

そして、南洋協會台湾支部の評議員には、野呂寧、木村久太郎、石井光次郎、東郷實、高田元治郎、賀来佐太郎、片岡秀太郎、楠正秋ら東洋協會（あるいは拓殖大学）の評議員を務めた人物が顔を揃えている。¹⁴⁾

つまり、南洋協會が東洋協會をモデルとして創設され、密接な人的關係を持っていたことから考えれば、両組織は親子のよ

うな關係と理解しても大きな間違いではない。

したがって、両組織の事業は競合的な重複というよりも、協力的な重複（オーバーラップ）によって、相互の事業を効果的に推進しようとしたかに見える。それは、東洋協會の関心が相対的には北方に向いていた面も關係している。

大正五（一九一六）年六月一日には台北で南洋視察団講演会が開催され、新渡戸稻造（二代学監。大正六年四月～同一年四月）が「南洋の将来」と題して講演しているが、この講演会は東洋協會と南洋協會台湾支部の共同主催であった。ここで新渡戸は、（一）熱帯氣候の工業利用（二）希少鉱物資源発掘（三）人口増加の傾向（四）列強植民地支配に対する反発の高まり（五）鉱業・製造業発展——などの南洋の趨勢や可能性を指摘した上で、「日本の使命は果たして何であろうか」と問いかけている。¹⁵⁾

その後も、大正七（一九一八）年一二月一四日の蒙古事情に関する講演会、大正八（一九一九）年一月二五日の米國、インドに関する講演会などが東洋協會と南洋協會台湾支部の共同主催によって催されている。¹⁶⁾

つまり、南洋研究の成果を共有する形で東洋協會と南洋協會は協力していたのである。

重要な点は、拓殖大学が台湾協会・東洋協会の附属教育機関として存在したのに対して、南洋協会には附属の教育機関が存在しなかったということである。むろん、南洋協会は、南洋地域では教育事業を展開したものの、日本国内では講習会という形式以外には行っていない。つまり、南洋協会の調査・研究活動等の事業の蓄積に基づいた日本国内における人材教育は、拓殖大学が担ったと考えてよさそうである。というのも、拓殖大学で南洋事情の講義をした講師陣こそ、南洋協会の主要講師陣であったからである。

それは、南洋協会が昭和四（一九二九）年九月から開始した南洋事情講習会の講師陣に明確に示される。第一回（昭和四年九月四〜七日）では、井上雅二が開会の辞を述べ、戦前期の拓殖大学の南洋事情を担当した飯泉良三が「南洋概観」、「暹羅国情」などの演題で講演、第二回（昭和五年五月二一〜二三日）には井上が「南洋協会の使命」、飯泉が「南洋の概況」、同じく拓殖大学の南洋事情を担当した木村増太郎が「南洋に於ける華僑」と題して、それぞれ講演している¹⁷。

東洋協会の南洋重視

すでに、東洋協会は、『台湾時報』創刊号（明治四二年）か

ら「海外事情」欄でフィリピンを扱い、その後も「爪哇における強制耕作制度」（明治四四年一月）など、度々南洋事情を取り上げている。東洋協会は南洋群島占領後高まりを見せたマスメディアの南洋ブームにも支えられ、南洋重視の姿勢を一層鮮明にしていく。大正三（一九一四）年一月二五日には、東洋協会は、東洋各地産業社会状態の講究を目的として第一回調査委員会を開催しているが、委員会の第一部は「台湾及び南洋」であった。

東洋協会は、大正五（一九一六）年十一月一日には丸の内中央亭で講演会を開催、バタビヤ領事の浮田郷次が「南洋及豪州視察談」と題して講演している¹⁸。

大正八（一九一九）年六月のヴェルサイユ講和条約で南洋群島が日本の委任統治領になることが決まり、大正一〇（一九二一）年七月に軍政から民政に移行する。大正一一（一九二二）年四月には南洋庁が設立されている。

ただ、日本政府は南洋重視で一貫していたわけではなく、大陸政策が優先されていた。南洋重視が明確になるのは、昭和一一（一九三六）年以降であり、それが決定的になるのは昭和一五（一九四〇）年以降である。その最も大きな要因は、ノモンハン事件で陸軍の北進機運に冷水が浴びせられたことである。

このため、日本全体としては、日米開戦に直面して、泥縄式に

ある。

南洋で活躍できる人材育成に乗り出した感がある。これに対し

て、南洋協会の支援を受ける形で、南洋重視の姿勢を貫き、地

道に南洋語、南洋研究を推進してきたのが東洋協会であった。

だからこそ、昭和一五（一九四〇）年以降の南洋熱の高まりの

中で、東洋協会と拓殖大学は、中核的な役割を果たすことがで

きたのである。

ただし、興亜の理想による南進と、日本政府の南進とを同一

視することは間違っている。日米開戦に至って、両者の当面の

目標は一致したのだが、元来の立場には微妙なずれが見られた。

東亜経済調査局付属研究所（通称大川塾）で学んだ山本哲朗

は、「軍の南進と大川先生の南進は目的も手段も全く違ってい

ました。片や、軍は資源目当ての砲火による武力戦。片や、先

生はアジア復興のための正直と親切を武器とする全くの非武装」

であったと書いている。¹⁹ 山本の見方はやや単純化し過ぎだが、

拓殖大学に流れる大川流の雄飛の精神がいかなるものであった

かを考える上で、本質を衝いた指摘であろう。

いずれにせよ、東洋協会は南洋重視の姿勢を貫いていた。以

下の通り、日本全体が南洋政策に関心を強める昭和一一（一九

三六）年以前から南洋関係の講演を持続的に推進していたので

大正八年四月一九日

「南洋占領地」（臨時南洋群島防備隊
民政部長・手塚敏郎、通俗講演会）²⁰

大正一二年七月

「南洋」（第二回海外事情講習会）²¹

大正一三年八月

「佛領印度支那事情」（大野恭平、第
四回海外事情講習会）

大正一三年八月

「南米及南洋の移植民及経済事情」
（海外興業会社専務取締役・龍江義
信、大阪海外事情講習会）²²

大正一四年四月二五日

「佛領印度支那について」（佛領印度
支那答禮随員委員長・松本幹一郎、
海外事情講演会）²³

大正一四年七月

「南洋の各植民地とその統治策」（東
郷實、第五回海外事情講演会）²⁴

昭和三年一月一九日

「最近の南洋事情と投資問題」（井上
準之助、第六回東洋現勢研究会）²⁵

昭和五年四月一八日

「委任統治地域南洋群島の近状」（南
洋庁長・横田郷助、東洋現勢研究会）²⁶

昭和五年六月四日

「我国の経済上に於ける南洋の重要

性」(南洋協会幹事・飯泉良三、第八回海外事情講習会)⁽²⁷⁾

昭和六年六月一二日
「南洋と日本」(東郷實、第九回海外事情講習会)⁽²⁸⁾

昭和八年九月二一日
「委任統治南洋群島とフィリピン」
(東洋協会理事・加藤政之助、現勢研究会)⁽²⁹⁾

昭和一〇年六月
「蘭領印度事情」(スラバヤ日本商品陳列所々長・小原友吉、第一三回海外事情講習会)⁽³⁰⁾

興亜と南洋

拓殖大学で教鞭をとった大川周明や満川龜太郎に象徴されるように、興亜論者の視線は南洋に限定されず全世界、全亜細亜に注がれていた。当然、南洋情勢の研究は興亜論的な色合いを帯びていたのである。

南洋は、欧米列強の帝国主義的進出に対する有色人種の危機感という観点から注視されていた。例えば、早い時期のものとして、後に三宅雪嶺らと政教社を設立する志賀重昂が明治二〇

(一八八七)年四月に著した『南洋時事』が挙げられる。そこで、志賀は「嗚呼黄、黒、銅色、馬來ノ諸人種ハ今日ニシテ自ラ計ル処無ケバ、竟ニ此世界は白哲人種ノ専有ニ帰セン」と書いている。

宮崎滔天や梅屋庄吉⁽³¹⁾のように、南洋においても列強からの独立を目指す民族運動家に手を貸そうとした日本人は少なくない。戦前の日本は戦後半世紀で言われるところの帝国主義の膨張政策であったとする見方が根強く残されているが、それは一面的な見方といわざるを得ない。弱肉強食の時代に日本が生存をはかるには、力が必要であったし、何よりアジアが連帯して欧米支配から脱し、独自の近代化を図るべきだという理想は確かに存在していた。

しかし、そうした「興亜の理想」を実行に移すには、国力を養う必要があった。だからこそ、戦前の列強との協調路線と興亜路線とは微妙な関係にあった。一九三〇年代に入るまでは、興亜論はそのまま日本の政策としては採用されることはなかったのである。

例えば、日本の興亜論者たちは南洋地域の植民地支配の打破、民族解放を願って行動していたが、そうした行動は時に日本政府の考える国家利益に抵触していたのである。確かに興亜の理

想を排して、あくまでも現実的に日本の国益を追求しようという立場もあったかに見える。しかし、興亜の理想を政策として展開することには確かに大きな困難があった。日本が国力を省みずに列強を同時に敵に回すリスクは大きく、日本の国力を養いつつ、アジアの覚醒と開発を促進していくのが当面の方策として肯定されたのではなかったか。

もともとアジア解放のためには、アジアにおける欧米の政治的・経済的支配を弱めていくことが不可欠であり、まずはアジア保全のために日本がアジアの真空を埋める必要があったと考えることができる。また、アジアの自立のためには、被植民地アジア自らを覚醒させ、国作りに取り組める基礎を固めることが必要であった。日本の「植民政策」には、そうした意図がこめられていた。つまり、日本の「植民」は「覚醒の触発」であり「開拓」であった。

独自の植民論

日本の「植民地政策」が決して欧米の略奪型植民地政策ではないことを明確にする目的もあって、拓殖大学では興亜論とともに独自の植民政策論が展開されていた。これもまた、拓殖大学の南洋研究の性格を規定する重要な側面である。

特に、早い時期から南洋重視の姿勢を示していた新渡戸稲造は、植民政策の専門家であった。明治四二（一九〇九）年に東京帝大に「植民政策講座」が置かれたが、最初に担当したのが新渡戸であった。

新渡戸特有の植民地観は、大正二（一九一三）年の「植民の終局目的」によく示されている。ここで彼は、「そもそも土地は天与の贈にして、国籍の区別を問はず、人種の差別を論ぜず、人類の為に最もよく利用する者に帰す」と書いている。⁽³²⁾

草原克豪氏もこの点に注目し、「新渡戸にとっては、植民の目的は、天賦の能力が異なる民族がお互いに協力することによって地球上の資源を有効に開発・活用し、人類文化を向上させることであった。そこから、植民の終極目的を実現するためには、土地は天から授かった人類共有のものであって、国籍、人種を問わず人類一般のために利用しなければならないという『世界土地共有論』の考え方が出てくる」と指摘している。⁽³³⁾

拓殖大学で南洋事情を講じた東郷實もまた、植民政策の専門家であった。すでに明治三九（一九〇六）年に、先駆的な著作として『日本植民論』を出している。また、同じく拓殖大学で南洋事情を担当した飯泉良三も植民政策に詳しかった。こうした拓殖大学の植民政策研究の活発さは、昭和一七（一九四二）

年に設立された大日本拓殖学会の創立準備委員に板垣與一、東畑精一とともに、永田秀次郎、大川周明、東郷實、飯泉良三が名を連ねていたことにも示されている⁽³⁴⁾。

東洋協会の評議員も務め、拓殖大学の南洋重視の姿勢を持続させる上で重要な役割を果たしたと考えられる井上雅二もまた、独自の植民論を確立していた。例えば、大正八（一九一九）年に宮原民平（六代学監）によってまとめられた『植民講話』には、後藤新平、新渡戸稲造とともに井上の植民論が含まれている⁽³⁵⁾。

井上雅二の興亜と南進

井上雅二は、内田嘉吉とともに南洋協会設立に尽力し、一貫して南洋協会の中心にいた人物であり、東洋協会と南洋協会の接点ともなったキーパーソンとみていい。

彼は、南洋協会設立の翌大正五（一九一六）年から、東洋協会評議員を務めている。大正六（一九一七）年一月二十七日には、拓殖大学（東洋協会植民専門学校）で、教職員と生徒に対して植民地経営について講演している⁽³⁶⁾。後述する通り、拓殖大学でマレー語を担当していた別所直尋は、昭和二（一九二七）年九月に海外雄飛しようとする青年の短期養成を思い立ち、拓殖語学校⁽³⁷⁾を設立した。このとき科外講義を務めたのが井上であった。

しかも、興亜の立場からの南洋重視の論理を発展させる上で、井上は重要な役割を果たしている。

明治一〇（一八七七）年に兵庫県氷上郡に生まれた井上は、明治二八（一八九五）年に台湾総督府蕃民撫育掛に就いている。明治三八（一九〇五）年からは、韓国統監府財政補佐官、宮内府書記官を歴任した。この間、井上は東亜同文会の前身、東亜会の幹事を務めており、興亜論者の荒尾精に傾倒していた⁽³⁸⁾。

彼はやがて、南洋への夢を膨らませていく。興亜としての南洋雄飛を志すようになる過程で、井上が出会った一冊の本がある。矢野龍溪の『浮城物語』である。同書はもとも明治二三（一八九〇）年から、『郵便報知新聞』（後の報知新聞）に掲載されたもので、そこには「我々がこの地球に生まれ来つた以上、この地球を横行するの自由がある。日本に生まれたるの故を以て、その働きを日本にのみ限るべき道理はない。視よ、我々の眼前に横はる海洋は是れ天の我々をして地球に横行せしむる道路である。五大洲の中、何れかのところか、天の我々に蹂躪を許さざる地あらん。我々は既に此の地球に生まれ来つた。應に此の全地球を以て一舞臺をなし、稀世に大業を成すべきのみ、何ぞ必ずしも日本にのみ跼蹐たらんや」と述べられている。

井上は、龍溪が説く「南洋に進出して英蘭兩國を對手にジャ

バ、スマトラ方面の経路を試みる」ような南洋進出を理想とするようになった。⁽⁴⁰⁾

そして、明治四四（一九一）年、ついに井上は森村市左衛門翁の支援により南亞公司を設立し、南洋でのゴム栽培に着手した。多くの有力者たちが、この井上の挑戦を支援していた。桂太郎は井上に種々親切な忠言を与えた。また、台湾協会評議員を務めた岡部長職や福島安正、青木周蔵、成瀬仁蔵、徳富猪一郎、三宅雪嶺、明石元二郎らが賛意を示した。⁽⁴¹⁾井上は、後に次のように回想している。

「思へば私は遙けき興亜の一路を辿つて来た人間である。若干にして支那へ初めて渡つてから既に半世紀に近く、亜細亜を見て欧州に遊び、中亜、巴幹、ペルシャ、トルコを極めて帰朝、韓国の施政改善に参加し、更に興亜の南の基地を求めて南洋に進出、開拓の現地第一戦に立つこと十二年、或は南洋協会を起し、或は日本蘭印協会を創め日蘭協会を新にし……」⁽⁴²⁾

井上は、南洋に列強の勢力が存在していてもなお、日本が勢力に入っていく余地はまだ多分に残されているという立場に立つ

ていたが、矢野暢は、井上の考え方には後藤新平の主張の影響が見られると指摘している。⁽⁴³⁾

石原廣一郎の支援

東洋協会は、興亜論、植民（開発）論に支えられ、一貫して南洋重視の姿勢を崩さなかったが、興亜の立場からの積極的南洋政策を提唱していた石原廣一郎の役割も無視できない。

例えば、石原は昭和十四（一九三九）年二月七日に東洋協会第一五七回例会で「支那事変と南洋の重要性」と題して講演するなど、南洋の重要性を東洋協会で啓蒙したばかりか、昭和七（一九三二）年三月中旬には、拓殖大学学生の南洋旅行を支援している。⁽⁴⁴⁾

こうした石原の関与は、彼の南洋開発事業と直接関わっていたのである。石原は、すでに大正九（一九二〇）年九月、合資会社南洋鉱業公司（昭和四年八月、石原産業海運合資会社と改称）を設立、マレー半島ジョホール州スリメダン鉱山開発に乗り出していた。大正一三（一九二四）年五月には、トレンガヌ州ケマン鉱山を買収、自社船三隻で海運業を兼営するようになる。昭和六（一九三一）年三月には、日本主要港とジャワ、シンガポール間に定期航路を開設している。昭和一〇（一九三

五）年一月にはジョホール州パセル鉾山の開発に着手、昭和一二（一九三七）年六月にはマニラ石原産業株式会社を設立、フィリピン各地の地下資源開発に着手している。石原もまた、昭和四（一九二九）年から南洋協会評議員を務めており、井上雅二らと近い関係にあったと推測される。

同時に石原は南洋開発事業の推進に止まらず、南洋の民族独立運動を支持するようになっていた。例えば、石原はスカルノの片腕と称されたガトット・マンクプラジャの日本渡航を支援している。⁽⁴⁸⁾ さらに、大川の政治運動を支援していた。その橋渡しをしたのが、南洋通でもあった徳川義親である。「徳川林政研究所」や「徳川生物学研究所」などでも知られる義親は、大正一〇（一九二一）年に、尋麻疹の治療のため温暖地への転地療養を奨められ、マレー・ジャワへ旅行する。この際、ジョホール国王の厚遇をうけ、虎狩り、象狩りを行ったことは比較的良好に知られている。

義親は、昭和六（一九三一）年には、ハンティングなど東南アジア紀行をまとめた『じゃがたら紀行』を出版している。⁽⁴⁹⁾ 昭和一二（一九三七）年には、拓殖大学でオランダ語教育を主導した朝倉純孝とともに、『馬來語四週間』をまとめている。⁽⁵⁰⁾

石原は、同じ南洋通であった義親を介して大川と結び、国家

改造運動に本腰を入れようとしていたのである。昭和七（一九三二）年二月一日に結成された神武会（会頭大川周明）の活動も石原が全面的に支援していた。石原の志向は、列強との協調に配慮した南洋政策よりも、興亜の立場を前面に出した積極策であった。⁽⁵¹⁾

日本の南方政策

いずれにせよ、日本全体が南洋よりも中国・満洲への関心に傾いていた時代に、一貫して東洋協会は南洋重視の姿勢をとり、拓殖大学は南洋語・南洋研究の基礎を築いていた。やがて、日本の南方政策がクローズアップされる中で、東洋協会・拓殖大学は中核的な役割を担っていくのである。

昭和一一（一九三六）年八月七日には、五相（総理、外務、大蔵、陸軍、海軍）会議で「国策ノ基準」が以下のように決定された。

「南方海洋殊ニ外南洋方面ニ対シ我民族的経済的發展ヲ策シ努メテ他国ニ対スル刺激を避ケツツ漸進的和平的手段ニヨリ我勢力ノ進出ヲ計リ以テ満州国の完成と相俟ツテ国力の充実強化ヲ期ス」

同日の四相会議で出された「帝国外交方針」でも、「南洋」が「世界通商上ノ要衝ニ当ルト共ニ帝国ノ産業及国防上必要欠クヘカラサル地域」と位置づけられた。

そして、昭和一五（一九四〇）年八月一日、外相就任後最初の記者会見で松岡洋右は「我国現前の外交方針としては……大東亜共栄圏の確立を図るにあらねばなりません」と述べるに至った。このような状況の中で、日本全体が南洋への関心を強めていく。

東洋協会も持続してきた南洋への関心を基礎にして、さらに南洋研究を本格化させている。ただし、開戦に至るまで政府の南進と興亜論の南進が微妙にずれていたことはすでに指摘した通りである。

昭和一六（一九四一）年五月三〇日から六月四日まで、第一九回海外事情講習会を開催、東郷實が「日本と南洋」、スラバヤ領事が「列強の南方政策」、拓務省拓南局課長の高橋進太郎が「大東亜共栄圏と南方資源」、東京文理科大学助教授の内田寛一が「政治地理学上より見たる南洋」、経済学博士の井出季和太が「大東亜建設と南洋華僑」と題してそれぞれ講演した。⁽⁵²⁾

安南語講習所

東洋協会は、情勢の変化に対応して、仏印情勢を重視、昭和一九（一九四一）年八月には安南語講習所を設置している。趣意書は、次のように謳っている。

「新東亜建設の一環としての南方共栄圏建設は、正に我等に課せられたる刻下の急務なり。この秋に当り、彼我相互の各般の認識不足より生ずる徒なる摩擦相剋の爲め、協力一致共栄圏建設に邁進し得ざるものありとすれば、之れ実に新東亜建設の前途のため甚だ遺憾とする所なり。而して、現在は正に彼の我を知らず我の彼を識らざるの実情にあるを奈何せん。殊に南方共栄圏建設に最も重要な役割を有つ仏印に対しては、その感特に深きものあり。本会は茲に鑑みる所あり、聊か新東亜の建設に寄与せんが爲め、安南語講習所を開設し、率先仏印の語学・事情を修得せしめ、以て両民族友好親善の実を挙ぐるに貢献する所あらんことを期す。是れ本所を設立する所以なり」⁽⁵³⁾

安南語講習は三回にわたって開催され、合計八〇数名の修了

者を出した。日米開戦によって、南洋対策はさらに急務となり、東洋協会は昭和一八（一九四三）年五月には、安南語講習所を強化して佛印學院を設立している。カリキュラムも次のように拡充された。⁵⁴

安南語

文法・作文

安南人 原文雄

翻訳・会話

安南人 文玉堂

講読・発音・会話

安南人 杜 萬里

文法・講読・翻訳・作文

教務主任 足立一平

”

助 教 廣瀬正義

”

教 生 鎌田 弘

フランス語

文法・講読・発音・翻訳・作文・会話 谷間 晴雄

南方事情——一般南方事情の外仏印史・同地理

其他政治、経済、産業、文化等（各大学教授及權威担当）

鍊 成

開戦後、東南アジア地域の言語に通じた人材が求められた。

象徴的なのは、旺文社（当時は欧文社）が昭和一七（一九四二）

年三月に発行した『馬來語大辭典』⁵⁵である。この辞典はB5判一〇七四頁というボリュームで、「序に加へて」において発行者の赤尾好夫は次のように記している。

「昨年十二月中旬僕は、参謀本部の某大佐殿から突如本書刊行についてのご相談をお受けした。相談と云ふよりもむしろ命令と云ふ方が適切」

ここには、政府による強い指導の跡が見られるが、すでに明らかな通り、東洋協会は開戦とともに南洋重視に転じたのではなく、大正時代から南洋重視を持続してきた。だからこそ、南洋雄飛の人材教育で中核的な役割を果たしていたのである。

運営母体である東洋協会のこうした性格は、拓殖大学の教育・研究活動に反映されていた。だからこそ、戦前期において拓殖大学は、南洋語、南洋事情の教育・研究で先頭を走っていたのである。後述する通り、昭和一七（一九四二）年八月には拓殖大学は東洋協会とともに、南方大学講座の設置に動いており、それは文字通り南方大学と呼ぶにふさわしい充実した講座であった。

敗戦による変化

しかし、敗戦とともに、事態は一変した。日本はGHQに統

治され、国家主権を失っただけでなく、興亜の理想は「侵略主義」として完全に否定された。

だが、東西冷戦の勃発によって、日本は再び東南アジアへの関与の機会を得る。アメリカは日本弱体化政策を棚上げして、共産主義陣営の防波堤にすべく、日本の復興を支援するようになった。また、日中の接近を嫌ったアメリカは、東南アジア諸国が日本の主要貿易相手となることを歓迎するようになったからである。昭和二六（一九五一）年にサンフランシスコ講和会議で、主権を回復した日本は、東南アジア諸国との関係再構築の前提として戦争賠償問題の解決を急いだ。

東南アジア諸国との賠償は、ビルマ（一九五五年）、フィリピン（一九五六年）、インドネシア（一九五八年）、南ベトナム（一九六〇年）と進み、日本は東南アジアとの貿易を推進するようになる。

二 教育スタッフの変遷と学風

マレー語教育創成期

拓殖大学（東洋協会専門学校）は、東京外国語学校が東洋語速成科に馬來語科を開設した明治四一（一九〇八）年に先立つ

明治四〇（一九〇七）年九月に、マレー語教育を導入した。この年、本科を卒業した者のための研究科の第一部に、露語、蒙古語とともにマレー語を置いたのである。⁽⁵⁸⁾ここから、北方と西方とさらに南方の三方面をにらんでいることがわかる。

大正五（一九一六）年一〇月には、三年級台湾語科生のマレー語兼習志望者に対してマレー語授業を開始し、大正八（一九一九）年には本科の第二外国語として「和蘭語」とともに「馬來語」が正式に置かれた。⁽⁶⁰⁾この間、大正二（一九一三）年五月には、アフマッド・ビン・アンバック（Ahmad bin Ambac、在職期間…大正二年五月～大正三年三月）⁽⁶¹⁾が、大正五（一九一六）年一〇月には、我が国におけるマレー語界の先駆者バッチ・ビン・ウォンチ（Bachee bin Wanchik、在職期間…大正一〇年三月）⁽⁶²⁾が、それぞれマレー語教師に就いている。戦前のマレー語履修者は皆、彼と平岡閔造共著の馬日辞典を利用して⁽⁶³⁾いる。

東洋協会と南洋協会の「協力的な重複」は、南洋語教育においても見られた。バッチ・ビン・ウォンチが講義を開始した大正五（一九一六）年一〇月、南洋協会台湾支部は、マレー語の短期講習会を開始している。大正一三（一九二四）年六月まで、一回に亘って三カ月間の講習会を開催している。⁽⁶⁴⁾第一回の講

師は後出する上原訓蔵である。さらに南洋協会は、日本国内でも大正六（一九一七）年五月から和蘭語講習会、大正一〇（一九二一）年から馬來語講習会を開催している。

別所直尋と上原訓蔵

さて、拓殖大学は大正九（一九二〇）年四月に、支那語・台湾語・朝鮮語の三学科を改め支那語・露語・南洋語（蘭語・馬來語）の三学科とした（台湾語は選択科目に、朝鮮語は廃止）。そして翌大正一〇（一九二一）年四月、拓殖大学のマレー語教育は、いよいよ本格化する。イブラヒム・ビン・パッチ（Ibrahim bin Pachee、在職期間：大正一〇年四月～大正一三年三月）、上原訓蔵（在職期間：大正一〇年四月～大正一三年一月）、アブドゥル・ラー（Abdul Rani、在職期間：大正一四年一月～大正一五年六月、昭和六年四月～昭和七年七月）、別所直尋（在職期間：大正一五年一月～昭和六年六月）により、日本人とネイティブの二人教育体制がとられるようになったのである。授業は第二語学として一学年時と二学年時にそれぞれ週三時間、そのほか三学年時には選択科目として週三時間あった。

この頃のネイティブ教員はいずれも英領マラヤ出身者すなわ

ちマレー人であった。蘭領東インド出身のインドネシア人はまだいなかったのである。また、すべてのネイティブ教員と上原訓蔵は、東京外国語学校（現東京外大）との兼任であった。マレー語教育の草創期である当時は国内にそれを教えるに足る能力を有する教員はほかにいなかったからである。また、これらの教員も拓殖大学と東京外大以外に教える場を持たなかった。拓殖大学では東京外大とまったく同じ教授陣による我が国最先端の馬來語教育が行われていた。

上原は東京外大第二回の大正五（一九一六）年卒で、大正九（一九二〇）年六月から文部省留学生として一年間、シンガポールと蘭領東インドで学び、帰国後は東京外大教授を務める傍ら拓殖大学の教壇にも上がった。インドネシア語のスペルを最初に我が国に紹介した人物としても知られている。上原はその後、昭和二八（一九五三）年から再び拓殖大学で教鞭をとった。

別所は、明治二一（一八八八）年に宮城県で生まれ、大正三（一九一四）年東京外国語学校馬來語科を第一回卒業生として卒業した。上原の一期先輩である。⁽⁶⁵⁾卒業後、別所はシンガポールの日馬公司に入った。この長期滞在が別所には貴重な体験となった。彼は後に、南洋研究会で「南洋における日本人」と題して講演し、次のように語っている。

「私は外語の馬來語を出て南洋に十數年居つたので其の間に、十分眞實の南洋を知つて居り、外務省なんかの役人が一寸と行つて直ぐ歸へつたのと少し異にする」⁽⁶⁷⁾

大正一一(一九二二)年、別所はシンガポールから帰国、翌年拓殖大学のマレー語講師に就任した。キャプテン・クックのあだ名で親しまれていた別所⁽⁶⁸⁾は、学生に海外雄飛を強く勧めた。ところが、昭和六(一九三一)年、別所は急逝する。別所の死去について、岡本精一は「多年の実地練習から獲得された生きた馬來語を学生に教へると同時に青年の海外進出を称揚され、その功績は没すべからざるものである」と述べている⁽⁶⁹⁾。

大正時代に拓大で教鞭をとった教員のマレー語に関する主な著作は、年代順に次の通りである。

大正九(一九二〇)年

・バチー・ビン・ワンチ校閲、上原訓蔵編『馬來語第一讀本』

東京・岡崎屋書店

・上原訓蔵『獨習南洋語研究』日進堂

・上原訓蔵『馬來語第一讀本』岡崎屋書店

大正一二(一九二三)年

・上原訓蔵『初等馬來語教科書 上巻』三橋権之助発行

昭和二(一九二七)年

・平岡閔造・バチー・ビン・ウォンチ『馬來—日本語字典』

台湾・南洋協会台湾支部

・アブドル・ラーニー・岡田丈夫『馬來語講座』東京・海外事情普及会

昭和一〇(一九三五)年

・バチー・ビン・ワンチ校閲、上原訓蔵著『馬來語教本』大阪・新正堂

昭和一六(一九四一)年

・上原訓蔵『馬來語要諦』誠美書閣

昭和一七(一九四二)年

・上原訓蔵『標準上原マレー語』全四巻、晴南社

・上原訓蔵『最新馬來語教本』新正堂

昭和一九（一九四四）年

・上原訓蔵『上原 日馬辞典』晴南社

昭和二三（一九五八）年

・上原訓蔵『基礎インドネシア語 基礎語学双書』大学書林

昭和三八（一九六三）年

・上原訓蔵『インドネシア語基本三〇〇〇語』大学書林

宇治武夫と戦時のマレー語

昭和初期において拓殖大学のマレー語教育を支えたのは、上原訓蔵や『コンサイス馬來語新辞典』（愛国新聞社、昭和一七年）などの著書で知られる宮武正道（天理外国語学校卒）と並び、我が国のインドネシア・マレーシア語教育の確立者といわれる宇治（後、藤本）武夫である。

宇治は、別所が急逝した後を受けて、昭和六（一九三一）年九月から昭和二四（一九四九）年九月まで拓殖大学で教鞭をとった。昭和二四（一九四九）年四月の新制大学としての拓殖大学（当時、紅陵大学）の開校時の二八名からなる教授陣の一人でもある。末永晃名誉教授（学四一期）は、「別所以上に宇治の

マレー語教育は本格的なものだった」と評価している⁽⁷⁰⁾。

さて、大正一一（一九二二）年に三八名であった南洋語組の新入生の数は、昭和四（一九二九）年には予科一部一年八一名、昭和一〇（一九三五）年には予科一部一年二四名・二部一年一六名、昭和一一（一九三六）年には予科一部一年七一名・専門部一年二二名と推移した。当然ながら常に中国語（当時、支那語）に次ぐ人気言語であった。

ところで、東京外大の馬來語科は、この頃まだ隔年募集で、しかも二年に一度の卒業生が一五人前後であったから、拓殖大学はそれよりはるかに多くの人材に馬來語教育を施していた、ということ忘れてはならないであろう。

ところで、戦時中には、建設が目指される大東亜共栄圏においては、日本語・支那語そして馬來語が三大共通言語になるとさえ言われた。我が国の近現代史上、最も多くマレー語の学習書が刊行されたのも、この時期である。この時期にマレー語を履修した人は全国で万を数えたという⁽⁷¹⁾。

だが、こうしたマレー語学習の隆盛を、当時拓殖大学で教鞭をとっていた宇治は、必ずしも喜んではいなかった。むしろ、粗製濫造されるマレー語教材の出版状況を嘆いていた。

編者として序文を寄せたアミール・ハッサン（Amir Hasan）

『正統マライ語讀本』には、次のようにその思いが記されている。

「大東亜戦争に突入いたしまするや、利を得るに手段を選ばぬ悪質なる出版業者と、機を見るに鋭敏なる時局便乗主義者は、殆ど糊と鋏とを以つて短期間に作成したと思われるやうな悪書を洪水の如く巷間に氾濫させたのであります。

甚だしいものになりますと、毎頁二三十箇所もつづりの誤つたものや、正しくない発音を載せて、然かも尚ほ得意然として居るものなど五六種の参考書が私の手もとにあります。私も自分の研究資料に努めて多くの参考書を備へて置きたいと念願して居りますが、本屋の書棚から取り出して見ただけで、到底買ふ気にもなれなかつた様なものも二三ありました」。

宇治の他に、ジュマリ (Djumali)、スイト (Suwito)、斎藤又喜、高橋健太郎、牛江清名が戦時中に拓殖大学で教鞭をとった。ジュマリとスイトは、拓殖大学で最初のインドネシア人の語学教員である。インドネシア語とマレー語ではお互いに基本的な意思の疎通は可能なものの、細部においてはやはり異なる。しかもインドネシア語の方が文法的に難解である。

そうしたことから、拓殖大学がこの時期にインドネシア語のネイティブ・スピーカーを得たことは、語学教育の上で大きな進歩であった。開戦当初、日本にはまだインドネシア人は二人ほどしか居住していなかった。^②ジュマリとスイトはその中の二人という極めて貴重な存在であった。

日伊混血の山口義雄も戦後の一時期に拓殖大学で教鞭をとっている。また、大阪外大一期生 (大正一四年卒) の高橋は戦後まで教授として、拓殖大学の教壇に立った。

昭和一一 (一九三六) 年大阪外大卒の牛江清名は、戦中は慶応外語やオランダ語海外放送などと兼務、戦後は再び昭和五〇年代に日本大学や外務省などと兼務で、拓殖大学で教えた。牛江には、いずれも白水社から、『インドネシア語の入門』 (昭和五〇年)、『標準インドネシア会話』 (昭和五四年) などの著書がある。

一方、昭和一八 (一九四三) 年には拓殖大学に緬甸語 (ビルマ語) 講師として、モン・ツン・ニエンと大月フタエが着任している。

日本の国策として南洋語のできる人材の需要が高まる中で、昭和一一 (一九四一) 年四月には興亜専門学校 (亜細亜大学の前身) が、大陸科、南洋科、内地科・経済科の三科からなる本

科と専修科をもって開校されている。このうち、南洋科の定員は、大陸科の二倍の四二〇名で、南方で活躍できる人材教育をいかに重視していたかが窺われる。⁽⁷³⁾ 南洋科の語学講師陣は、宇治、斎藤、高橋の他に、山口を加えた四名であった。⁽⁷⁴⁾ その他、半沢耕貫が「南洋産業、南洋民情」を教えた。⁽⁷⁵⁾

また、昭和一六（一九四一）年九月には、興南学院南方語学校が設立されている。設立認可申請書は次のように謳っている。

「……大東亜共栄圏確立ノ大国是完遂ノ重大要素トシテ各民族語ニ通曉スルノ必要不可欠ノコトタルハ周知ノ事実ニテ候。然レ共我が国ノ外国語特ニ共栄圏内民族語ノ研究機関ハ真ニ不備ニシテ南方発展上遺憾ノ極と存セラレ候。吾人ハ夙ニ之ガ完全ナル究明並普及ヲ痛感致シ曩ニ南方事情講習会（海軍省・外務省後援）ヲ開キ既ニ四回ニ亘リ蘭印馬來語、タイ語、福建語ノ短期養成ニ尽瘁セシ所ト謂モ時局ノ要望ハ単ナル講習会ニテハ到底満足スルコトヲエズ正規語学校ノ建設ノ急務ヲ信ズルモノニテ候」

マレー語、タイ語、中国語（北京語、福建語）、安南語、ベトナム語の五部に分れ、六カ月で一期終了とするものであった。

それぞれの定員は、二〇〇名、九〇名、一九〇名、五〇名、五〇名でマレー語と中国語が重点とされていた。マレー語については、宇治と牛江が協力した。⁽⁷⁶⁾ 力の入れようは並大抵ではなかったようである。末永晃も、「興南学院南方語学校には、アジアの全地域の言葉が網羅されていたわけです。当時は、マレー語を教育する学校は都内に五〇カ所くらいありましたが、ここが一番力があつたと思います」と振り返っている。⁽⁷⁷⁾ 興南学院南方語学校と並び、三田の慶応外国語学校も権威があつた。

当時あちこちでマレー語を教えた宇治は、以下のような業績を残している。

昭和七（一九三二）年

・宇治武夫『連結式馬來語入門』東京・岡崎屋書店

昭和八（一九三三）年

・宇治武夫『最新馬來語大鑑』東京・岡崎屋書店

昭和一五（一九四〇）年

・宇治武夫『馬來語廣文典』東京・岡崎屋書店

昭和一六（一九四一）年

・南方連盟編・宇治武夫、ラデン・スヂョノ校閲『馬來語会話讀本』東京・蛍雪書院

・宇治武夫『連結式馬來語入門（改訂増補版）』東京・岡崎屋書店

昭和一七（一九四二）年

・宇治武夫『現地活用・馬來語会話』東京・蛍雪書院

・興亜協会編・宇治武夫『SINAR MATAHARI／マライ語讀本（初級用）』愛国新聞社

・宇治武夫『シナル・マタハリ マライ語讀本（中級用）』愛国新聞社

・興亜協会編・宇治武夫、ラデン・スジヨノ校閲・宮武正道『コンサイス馬來語新辞典』愛国新聞社

昭和一九（一九四四）年

・宇治武夫編・アミール・ハッサン『正統マライ語讀本』日本電報通信社

オランダ語教育

拓殖大学でオランダ語教育を主導したのが、大正九（一九二〇）年四月に講師として着任した朝倉純孝（在職期間…大正九年四月～大正一二年三月、昭和九年～昭和一三年⁷⁹）である。朝倉はオランダ語と共にマレー語の権威でもあり、また恐らく最も早くに「馬來語」や「マライ語」ではなく「インドネシア語」と題する著書を出した。

朝倉純孝のインドネシア・マレーシア語関連の主な著作は次の通りである。

昭和一二（一九三七）年

・朝倉純孝『馬來語四週間』大学書林

・朝倉純孝、蘭田顯家共編『馬來語読本 中等用』東京・海外高等実務学校

昭和一四（一九三九）年

・朝倉純孝、蘭田顯家『馬來語教科書（初等用）』東京・海外印刷所

昭和一六（一九四一）年

・朝倉純孝編・福島満『掌中マライ語辞典』タイムス出版社

昭和一七（一九四二）年

・朝倉純孝『東印度会話要訣（日本語―和蘭語―馬來語）』東京・外語学院出版部

・朝倉純孝『馬來語基礎単語二〇〇〇』東京・タイムス出版社

・朝倉純孝『自修蘭印馬來語』東京・タイムス出版社

・朝倉純孝『自修東印馬來語』タイムス出版社

昭和一八（一九四三）年

・朝倉純孝『マライ語新獨習』岡村書店

昭和二七（一九五二）年

・朝倉純孝『インドネシア語四週間 語学四週間双書』大学書林

昭和三〇（一九五五）年

・朝倉純孝『インドネシア語四週間 語学四週間双書（改訂

版）』大学書林

昭和三九（一九六四）年

・朝倉純孝編『インドネシア語小辞典』大学書林

昭和四〇（一九六五）年

・朝倉純孝『リンガフォンインドネシア語コース（テープ（カセット））Lingaphone 英語対照インドネシア語会話』大学書林

・朝倉純孝『マライ語四週間（新稿第一版）』大学書林

昭和四四（一九六九）年

・朝倉純孝『英語対照インドネシア語会話 改訂版』大学書林

一方、南洋協会は、大正六（一九一七）年五月から大正一二（一九二三）年まで前述のマレー語講習会と同様の形式でオランダ語講習会も開催していた。当初講師は東京外国語学校助教授の佐和山弥六が務め、三回目の大正八（一九一九）年から朝倉が務めている。⁸⁰

大正一二（一九二三）年には、岡本精一が拓殖大学でオランダ語を担当することになった。明治三一（一八九八）年に島根

県松江に生まれた岡本は、私立郁文館中学校を経て、大正七（一九一八）年に東京外国語学校馬来語貿易科に入学し、第二外国語としてオランダ語を選択した。岡本は上原にマレー語を学び、朝倉にオランダ語を習ったと考えられる。⁽⁸¹⁾ 大正一二（一九二三）年に拓殖大学講師に、昭和五（一九三〇）年に教授に就任している。しかし、昭和八（一九三三）年に三五歳の若さで亡くなった。岡本の死去に伴い、一時拓殖大学を離れていた朝倉が、昭和八（一九三三）年から再び教壇に立っている。

また、岡本と同時期に、デ・ハーラ・ラベルトン（在職期間…大正一四年一月、昭和六年四月～昭和七年七月）がオランダ語担当に就いている。⁽⁸²⁾ その後を継いだのが、哲学博士のヨセフ・エム・エイレンボスである。末永晃によれば、エイレンボスはベルギー人で、日本語が堪能だっただけでなく、十数カ国語を話した。末永はオランダ語を習いに毎週、彼のもとに通ったという。⁽⁸³⁾

戦時中には、鈴木敏夫（昭和一三年～）、熊倉美康（昭和一八年～）などが担当している。⁽⁸⁴⁾

興亜論と南洋事情

拓殖大学における南洋事情の講義は、興亜を重視する大川周明や満川亀太郎の講義と連動する独特の講義として位置づけられていたかに見える。

そこには、南洋語と南洋事情と興亜思想全般を併せて教育することによって、明確な目的意識をもって南洋に雄飛できる人材の育成が可能になるという考え方があったかに見える。

大川は、まさに拓殖大学の南洋語教育が本格化しつつあった大正九年（一九二〇）四月に拓殖大学講師（後に教授）に就任、植民政策、植民史を担当することになった。大正一〇年（一九二一）からは東洋事情の講義も任されている。

復興亜細亜の精神に注目していた大川の視線は全アジアへ注がれていた。当然、彼は早い段階から東アジアだけでなく、南洋、南アジア、西アジアを含めた興亜を構想していた。すでに、大正六（一九一七）年八月には『南洋協会会報』に「南洋と回教」を書いている。そして大正一〇（一九二一）年秋、大川は海外視察に出る機会を得た。当時、大川はインドなどにも強い関心を持っていたが、反英闘争との関わりなど政治的な問題があって、インド渡航は手控えた。そこで選んだのが南洋であっ

た。同年一〇月五日から三カ月間、大川は南洋を視察、オランダ東印度会社の植民政策の足跡を現地で調査する目的もあったとされている⁽⁸⁵⁾。

こうした南洋視察も拓殖大学における大川の講義に活かされたに違いない。大正一一（一九二二）年に刊行された興亜論の名著『復興亜細亜の諸問題』は拓殖大学での講義をまとめたものだが、そこには次のように南洋の覚醒について述べた部分もある⁽⁸⁵⁾。

「所謂アジア不安は、西はエジプトより、東はシナに至るまで、種々なる姿を取りて現われて居る。而してその不安・混沌の間に輝く一貫脈々の光は、実に復興アジアの精神である。従順羊の如きジャワ土民すら、熱心に黄色人種の聯合を唱えるに至った。ジャワ在住のシナ人は、オランダ政府の過酷なる圧迫と戦いつつ、本国のシナ人と密接なる関係を樹立すべく努めて居る。一九一六年、バタヴィアの回教首僧は、オランダ女王誕生日祝賀式に参列することを拒んだ⁽⁸⁶⁾」。

大正一一（一九二二）年三月には、大川の講義に心動かされた拓殖大学の学生大正一〇（一九二一）年度卒業生が、「魂の会」⁽⁸⁷⁾

を創立している。これは、同時期各大学で生まれた猶存社系学生団体の一つであり、東京帝国大学の「日の会」と「魂の会」とが双璧とされていた。

大塚健洋氏は、大川の『復興亜細亜の諸問題』について、「彼が教鞭を執った拓殖大学では、本書が学生に与えた影響は計りしれないものがあった。大川を慕って魂の会に集まった学生たちは、興亜の意気に燃え、本書を懐にして大陸、あるいは南洋へと旅立って行ったと、今なお語り伝えられているほどである⁽⁸⁸⁾」と書いている。

伊藤精二（学三〇期）もその一人である。秋田県由利郡本庄町で、住職の次男として生まれた伊藤は、昭和四（一九二九）年に拓殖大学に入学し、南洋語を専攻した。同時に、伊藤は大川の講義を聞いて、蘭印文化、イスラームを研究するようになり、卒業後南洋興発株式会社に就職している。大東亜戦争により召集、やがて予備役中尉として昭和一八年（一九四三）九月から、ジャワに進駐した第一六軍（治集団）司令参謀部別班で活躍した⁽⁸⁹⁾。

拓殖大学には、大川とともに、田中逸平⁽⁹⁰⁾というイスラーム先駆者の影響があり、現在のマレーシア・インドネシアを中心とする東南アジア地域の理解に重要な役割を果たした。

大川塾

拓殖大学の組織としての関係はないが、間接的に拓殖大学の教育の精神に影響を与えた大川の活動に、通称「大川塾」、東亜経済調査局附属研究所⁽⁹¹⁾がある。五・一五事件による刑を終えた大川は、昭和二三（一九三八）年四月に附属研究所開設⁽⁹²⁾、「練習生」を受け入れ、興亜に志して南洋や中東方面で活躍できるように育成した。

その目的は次のように謳っていた。

「将来日本ノ躍進発展ニ備ヘル為メ海外各地ニ派遣シ該地ノ政治経済及諸事情ニ精通セシメ所要ノ調査ニ従事セシムル目的ヲ以テ下記ノ条件ニ合致スル青少年ヲ訓育養成スルモノタリ」

「条件」として、「年齢満一七歳以下」、「身体強壯ニシテ如何ナル激務ニモ耐エ得ルコト」などが挙げられていた。

大川塾開講当初、大川の下で主事を務めたのが中島信一（学二三期）で、外務省側の担当者は情報第三課の事務官・高瀬侍郎（後に第一四代拓殖大学総長）であった⁽⁹³⁾。また、多くの拓殖

大学出身者が正副寮長として塾生訓練に当たっていた⁽⁹⁴⁾。昭和三四（一九三九）年四月には、外務省情報部にいた棕木瑳磨太（学三四期、後に拓殖大学理事長）も副寮長として赴任している⁽⁹⁵⁾。大川塾は、植民史、政治学、経済学、民族学、日本精神、国史、回教、体育などとともにアジア、中東の言語を教育した。大川は植民史や回教を自ら教えたほか、「亜細亜建設者」と称する講義も行っており、それはやがて同名の本としてまとめられている⁽⁹⁶⁾。礼儀作法の講義は南洋通の徳川義親が担当していた。

そのなかで、多くの時間を割いたのが語学である。拓殖大学と同様に語学ごとの班が形成されていたが、タイ語、マレー語、ペルシャ語、アラビア語、トルコ語、ヒンドゥー語などが置かれていた。この大川塾でマレー語を担当したのが宇治武夫であった⁽⁹⁷⁾。また、アラビア語は小林元や井筒俊彦などが教えていた。

大川塾では、昭和二三（一九三八）年の第一期生から第六期まで合計九五名が学んだ⁽⁹⁸⁾。彼らは、それぞれ南洋、中東に旅立ったが、開戦とともに、南方各地に散らばっていた塾生は全員ビルマ、印度作戦に向ったという⁽⁹⁹⁾。

満川龜太郎と別所直尋

一方、満川龜太郎は大正一三（一九二四）年一〇月に拓殖大学の講師となり（翌大正一四年頃教授に就任）、亡くなる昭和一一（一九三六）年まで教鞭をとった。「東洋事情」だけでなく、「植民政策」、「西伯利亚事情」、「ロシヤ事情」などを担当した。

満川の研究領域は極めて広範で、まさに世界中の情勢について分析していたが、南洋関係の動向についての研究もいくつかある。注目すべきは、興亜の立場から南洋各国の独立運動に言及していることである。例えば、「越南再建運動の現状及び其由来^(註)」ではベトナムのクオン・デのことを、「比律賓独立問題と日本^(註)」ではポンセラのことを取り上げている。

また、満川らは昭和五（一九三〇）年九月には「人種平等ノ大義ニ則リ亜細亜自彊ノ聖業ニ従事スベキ内外ノ人材ヲ養成スル」ことを目的として、興亜学塾を創設している。満川は塾頭に就くとともに、東洋近時外交史の講義を担当した。また、下中弥三郎、中山優、中谷武世らが講師を務めた^(註)。注目すべきは、外国語の講座も置かれ、安南志士の陳福安が安南語を、別所直尋がマレー語を担当していたことである。また、田中正明氏に

よれば、インドのビハリ・ボースらとともにクオン・デが顧問に就いていた^(註)。

興亜学塾設立に先立つ昭和二（一九二七）年九月、別所は、海外雄飛せんとする青年の短期養成を思い立ち、花小金井に拓殖語学校^(註)を設立している。同校は、拓殖大学の分校的な性格を持ち、南米科と南洋科から成っていた。南洋科には、「国際道徳」、「植民史及植民政策」、「南洋地誌及南洋特産物」、「南洋事情」、「熱帯有用植物及氣象測量」、「南洋貿易事情」、「世界事情」、「熱帯衛生」、「馬來語」が置かれ、東郷實、満川龜太郎らが講師を務めていた^(註)。

興亜学塾が興亜に力点を、拓殖語学校は南洋語・南米語に力点を置いているものの、どちらも語学と興亜論に基づく海外事情とを併せて教育しようという点で、極めてよく似た構造となっている。

木村増太郎と南洋貿易

当初、拓殖大学において南洋事情の講義を担ったのが、木村増太郎と東郷實で、昭和九（一九三四）年からは飯泉良三も担当している。

この三名はいずれも南洋協会の中心メンバーで、当時として

は最も南洋事情に通じた研究者であったと考えられる。

戦中には、南洋調査研究の体制は厚みを増していた。歴史のある台湾総督府、南洋庁、南洋協会、満鉄東亜経済調査局に加え、東亜研究所、太平洋協会、南方経済調査会、南方産業調査会、南方殖産資源調査会、南洋経済研究所、資源科学研究所、大東亜産業貿易調査会、タイ室東京事務所、南方栽培協会、東方問題研究所、外務省南洋局仏印資源調査室、開南探検協会といった機関が調査研究を推進した。⁽⁹⁾しかし、南洋協会は政府主導の南洋調査研究が活発になる以前から南洋調査研究を蓄積してきたのである。

さて、昭和十三（一九三八）年には、拓殖大学は第三学年の必修に海外経済事情を置き、その中に支那経済事情、ロシア経済事情、欧米経済事情とともに南洋経済事情を設置した。⁽¹⁰⁾この年には、大学専門部の選択科目にも南洋経済事情が置かれている。これらを担当したのは、水田信利と千秋克巳である。

遅くとも昭和四（一九二九）年までには南洋事情を担当するようになった木村増太郎（在任期間…大正一二年四月～昭和九年三月）⁽¹¹⁾は、南洋協会新嘉坡支部長（在任期間…大正七年九月～大正一〇年五月）⁽¹²⁾、同協会新嘉坡商品陳列館長（在任期間…大正七年五月～大正一〇年五月）⁽¹³⁾を務めた南洋貿易の専門

家（法学士、経済学博士）で、東京商工会議所理事も務めた。彼は興亜の立場に立ってアジアの貿易構造を考察していた。『支那南洋に対する企業貿易論』などの著書で、貿易構造と日本の利益、欧米の経済支配との関係を論じているが、決して日本の経済的利益の観点からのみ考えてはいない。

「凡そ我國の對支政策にしても、南方發展策にしても、元より文化的經濟的でなければならぬことは、最早言を俟たない。即ち我國として支那南洋の地方に對しては、啻に商品の販路を進展せしむることのみに止まらず、更に進んで彼地方の包有せる無限の富源を拓いて、其豊富なる物質を廣く東洋民族、尚進んでは世界人類の生活に如何に利用するかと云ふことを究め、以て一面憐れむ可き南洋民族をも文化の恩澤に浴せしむると共に、他面世界の文明に貢獻すると云ふ大事業に注目着手せねばならぬのである」⁽¹⁴⁾

ここには新渡戸稻造の植民論に通ずるものがある。

同書が書かれたのは、木村が拓殖大学で教鞭をとる直前のことだが、興亜による世界の発展を目指す拓殖大学の学風にふさわしい主張を展開していたのである。

木村は、東亜の発展のための貿易構造のあり方を求めた。大正一三（一九二四）年末に『拓殖文化』に書いた「我國民經濟の根基」では、日本の貿易構造が東亜秩序に与える影響という視点から、日本の貿易の過度の対米依存を指摘し、中国や東南アジアに対する東亜貿易が「看却せられた嫌ある」と書いている。その上で「我邦の經濟は、飽く迄東亜全體を包括したる一大經濟圏を根基として發展せしむることを必要とする」と説いている⁽¹⁵⁾。

いうまでもなく、木村は日支貿易の専門家でもあり、満州国の建国、世界の經濟ブロック化という事態の展開を受けて、貿易論からの独自の東亜秩序を構想していく。日本政府が興亜論を全面的に採用しつつあった昭和一五（一九四〇）年には、東亜經濟圏の理論を發展させている⁽¹⁶⁾。木村にとって、南洋への進出、南洋貿易の拡大は東亜の經濟秩序にとって重大な問題だったのである。拓殖大学の学生たちは、木村の講義によってさらに南洋への雄飛の気持ちを掻き立てられたに違いない。

東郷 實と植民政策

植民政策の専門家として南洋事情を担当したのが東郷實（在職期間…大正一五年）、昭和一四年頃から休職）である⁽¹⁵⁾。東郷

もまた、木村と同様に南洋協会に関与しており、同協会の台灣支部評議員を務めていた⁽¹⁶⁾。

『拓殖文化』が「紅陵学園 講座巡り」第三回で紹介した記事が東郷の学風をうまくつかんでいる。

「學部に南洋事情を講ずる農學博士東郷實は札幌農大の産んだ異才である。札幌を出て直に臺灣總督府に入り官途に在る事實に十有八年理論並に實際を深く究めた推しも推されもせぬ堂々たる植民學者として又政友本黨の新人として下院に議席を有する人である。博士は常に説く、

『植民政策の基礎は『科學』であり異民族統治の根本は『民族心理學』である。植民地原住民族の有する民族精神は『種の固定性』を有し過去數千年の間に馴熟せられた一民族の制度習慣を一朝にして打破し盡さんとする同化政策は遂に失敗に歸する運命を有するものであつて數世紀間に互る相異した歴史的状态及び環境も到底一民族の眞理の一點だに之れを變化せしめ得ざりしは植民史の明かに教ふる所である。科學的研究の結果より推す時は植民地統治は大方針は先づ原住民の人類學的研究を基礎とし其の風俗習慣を調査も之れに適合すべき特殊の制度にして共通の點を發見すれば初めて其の部

分的適用を爲すべきものである。臺灣の生蕃の如く人類學的に觀て日本人に極めて近く心的組織を同じうする種族の同化は可能なりと考へらるゝが臺灣人には此事到底望むべくもない。非同化政策に就き現今最も成功して居るのは和蘭の爪哇に對する政策であつて彼等は土人の風俗習慣を尊重し、亟端な教統政策を避け和蘭語を教ふるに就きても極めて漸進的な慎重なる態度を持し、官吏には土語を熟練せしめ裁判は馬來語又は爪哇語を使用して居る。而して熱帶植民地の統治上他の歐羅巴諸國の何れよりも卓越せるは和蘭なりと云はざるを得ないと云うのである』

斯くの如く博士の講ずる所は單なる南洋事情の敘述に止らず植民學者としての權威ある意見なるが故に極めて興味の津々たるものがある⁽¹¹⁾

『植民夜話』では、各国の植民地政策を詳細に分析・比較し「十人十色各々其特色を發揮しつゝある」と述べている⁽¹²⁾。

また、興亜を目指す東郷は、物質的發展への偏重を批判的にとらえていた。昭和一四（一九三九）年には精神文化への回帰を強調し、外国模倣の弊害を強調し、次のように警鐘を鳴らしている。

「南洲先生が言はるゝ様に、彼に學んで我國を開明に進めんとならば、先づ我國の本體を確かと据ゑてかゝらなければならぬ」⁽¹³⁾

このような立場に立つ東郷は、欧米の支配を脱してアジア全体が健全な復興を遂げることを目指していた。昭和一一（一九三六）年七月、東郷は『拓殖大学新聞』に「庶政一新は『全亜細亜』を目標として」を寄稿し、当時盛んに唱えられるようになった庶政一新が国策の羅列に過ぎないとして、「亜細亜に國する十億の民の統てに眞の幸福と平和を与える」という大使命に即して新國是を確立することによって国策は遂行できると主張している⁽¹⁴⁾。

岡本精一と飯泉良三

南洋語のエキスパートであるだけでなく、東郷らの植民地政策の研究をも吸収して、独自の南洋研究に乗り出したのが、岡本精一であった。朝倉があくまで言語学者であったのに対し、むしろ岡本は地域研究者としての側面が強かったようである。

南洋に對する列強の植民地政策の分析では、東郷の植民地政策研究の影響を受けている。

「近代に於ける植民地政策の趨勢と理想」、「和蘭の植民地に對する教育に就て」などでは、民族心理を重視すべきことを説いた東郷の説を援用している。

岡本の研究の詳細については、石橋重雄の『岡本精一——インドネシア・ムルデカ（独立）の源流』解題に譲りたいが、オランダの植民地統治原理の分析、インドネシア経済研究の古典とされるロッテルダム大学経済学教授ホングレーブ『蘭領印度經濟史略の結論』の翻訳や蘭領印度の沿海漁業への着目など、その研究の先駆性は明らかである。

一方、飯泉良三は、東洋拓殖の参事を経て、南洋協会幹事に就いた南洋問題の専門家であり、早い時期から南洋事情に関する研究を行っていた。すでに大正一〇（一九二一）年には『南洋研究叢書第二編 蘭領東印度土地法』をまとめている。南洋協会が発行する『南洋』などに多くの論文を書いているほか、同協会主催講演会の講師の中心的人物であった。拓殖大学で教鞭をとる四年前の昭和五（一九三〇）年六月四日に東洋協会の海外事情講習会で「我国の經濟上に於ける南洋の重要性」と題して講演を務めたことは先述した通りである。飯泉は、南洋事情に通じてただけでなく、興亜の立場から日滿支經濟との關係で南洋經濟の重要性を論じていた。

南方大學講座

すでに述べたように、開戦後、国を挙げての南洋研究振興が叫ばれたが、そうした時代に拓殖大学が中核的な存在として対応し得たのは、以上のような南洋語と南洋事情教育の蓄積があったからにはかならない。そして、明確な目的意識を持って海外に雄飛するために必要な言語と地域事情を身につけるといふ点では、大川塾、興亜学塾、拓殖語学校の精神こそが、先駆をなしていたといっている。

昭和一七（一九四二）年七月に拓殖大学が東洋協会、東京市とともに主催した南方大學講座にそれは象徴的に示されている。その講座科目と講師は、以下のように南洋専門家の大結集となっている。拓殖大学関係者としては、宮原民平が支那民間信仰と華僑を、宇治武夫と齋藤又喜がマレー語を、朝倉純孝が南方言語をそれぞれ担当している。それ以外にも、細野軍治（教授・評議員）⁽¹²⁾、永雄策郎（教授・評議員）、鈴木憲久（第八代総長）松前重義（評議員）らが教鞭をとっている。

南方統治と經營	貴族院議員	赤池 濃
大東亞地政學及産業	經濟學博士	川西 正鑑
立地計畫		

日本海外發展政策論	經濟學博士	永雄 策郎	同	拓大教授	齋藤 又喜
大東亞廣域經濟論	經濟學博士	鈴木 憲久	佛印事情	元ハノイ總領事	永田 安吉
大東亞新秩序外交	法學博士	細野 軍治	泰國事情	東京日日新聞社總務部長	藤岡 啓
南方地下資源	理學博士	藤本 治義	ビルマ事情	ラングーン駐在副領事	本間幸次郎
南方林産資源	林學博士	蘭部 一郎	マレー事情	南洋日日新聞社主筆	野村 貞吉
南方農産資源	拓務技師	仁瓶 平二	東印度事情	南洋經濟研究所囑託	三吉 朋十
南方資源政策	拓務省殖産局長	竹内 徳治	比律賓事情	南洋經濟研究所囑託	三吉 朋十
物資及技術動員論	工學博士	松前 重義	印度事情	立正大學教授	木村 日紀
南洋發展の史的展望	文學博士	幣原 坦	豪州事情	外務事務官	根岸 國義
南方民族政策	醫學博士	古屋 芳雄	南洋語教育の続行		
南方民族論	民族問題研究所調査官	小山 榮三			
南方華僑問題	經濟學博士	井出季和太	敗戦によって、戦前・戦中の日本の行動が断罪される中で、拓殖大学も戦前のままの姿では生き残ることが難しい状況におかれた。校名変更はその間の事情を反映している。また、GHQによって問題視されそうな学科は廃止された。それでも、語学教育と海外研究は続行され、南洋語 ^(註) の授業も続けられた。この時代、大半の学校ではマレー語を正科からはずし、拓殖大学のほかは東西両外国語学校と天理外国語学校のみが、正規の学校としてインドネシア語教育を続行した。 ^(註) 戦後間もない頃に教壇に立ったのは、宇治、高橋、山口の		
支那民間信仰と華僑	拓大學監	宮原 民平			
南方と回教	回教圈研究所	鏡嶋 寛之			
熱帯醫學	醫學博士	金井良太郎			
南方氣象	理學博士	荒川 秀俊			
南方建設戦と帝國陸軍	大本營陸軍報道部員	堀田 吉明			
南方建設戦と帝國海軍	海軍大佐	大宅 由耿			
南方言語	東京外語教授	朝倉 純孝			
マレー語	拓大教授	宇治 武夫			

拓殖大学・南洋語（インドネシア語等）及び南洋（東南アジア）研究の系譜

ほかに、市川正晴（学三七期）、サアリ・イブラヒム（Saari Ibrahim）、スクリスト・サストロワルシト（Sukristo Sastrowarsito）らである。

市川正晴は、拓殖大学の卒業生の中でインドネシア・マレーシア語講師として最初に母校の教壇に立った。戦中、市川はNHKのマレー語海外放送などに携わっていた。だが、戦後の一時期のみで市川は拓殖大学の教壇から去る。当時の拓殖大学は経営的に逼迫し、教員に十分な給与を支給することができなかったことなどが、その理由と思われる。

サアリ・イブラヒムとスクリスト・サストロワルシトは、いずれも元南方特別留学生である。南方特別留学生とは、第二次世界大戦中に日本政府が南方占領地域から将来の指導者を養成することを目的に招聘した留学生である。^⑧インドネシア地域からは昭和一八（一九四三）年六月と昭和一九（一九四四）年六月の二度にわたり、総勢八一名が来日した。そして、そのうち五一名は終戦後も日本に残り勉学を続けた。^⑨学業を続ける傍ら拓殖大学でインドネシア語の指導に当たったサアリもスクリストもまだ年齢的に若く、それゆえ二人が住んでいた国際学友会の留学生寮には、師弟の壁を越えて友情で結ばれた拓殖大学生たちが頻繁に訪れた。サアリはその後、駐日インドネシア大使館

やボイス・オブ・アメリカ（VOA）勤務を経て帰国、スクリストもVOA勤務を経て帰国した。

さて、昭和二〇年代前半の拓殖大学のインドネシア・マレーシア語教育にとって最も大きなできごとは、それまで教授陣の柱であった宇治が昭和二四（一九四九）年九月をもって辞職したことである。それ以前に山口や市川も拓殖大学から去っていた。そうして拓殖大学には、歴史あるインドネシア・マレーシア語教育を十分に施し得ぬという一時的空白期が生じた。

南洋語組の学生たちは当然ながら大学の教育姿勢を批判した。直ちに語学教員を配置せよ、と学生側から要求を突きつけられた当時の熊埜御堂健児専務理事は、学生たちにその下駄を預けた。つまり、学生たちの力で適当な人材を見つけてくれさえすれば、その人物に講義を委ねる、と約束したのであった。

学生側は直ちに宇治や幾人かの卒業生にも参加をお願いして協議に入った。そうして白羽の矢が立ったのが、戦時中、マレー語従軍通訳として高い評価を得ていた末永晃であった。

末永 晃による復興

末永は昭和三（一九二八）年四月、当時の福岡県八幡市天神尋常小学校に入学した。当時、町内に「英語・マレー語教授し

ます」との看板を出している家があり、子供心に英語は判るがマレー語というのは誰が勉強するのだろうと不思議でしかたがなかったという。しかし、このマレー語という言葉が、その後引き続き末永の胸の中に住み着いてしまった。そして、後年奇しくも末永は拓殖大学で第二語学にマレー語を選択必修科目として履修することになった。

日米が開戦すると、末永は和田盛雄（学四二期）、鈴木照雄らの仲間と議論した。「この際、習得したインドネシア語を活用しないのは折角勉強した甲斐がない」等々の激論が展開され、結局従軍志願することになった。昭和一八（一九四三）年一月七日、末永は学生通訳七人が通訳班五五人の一員である事を知らされた。通訳班は英語の二五人、インドネシア語三〇人で編成されていた。昭和一八年（一九四三）半ばには、軍の転進でスマトラ勤務となり、三年間アチェ州勤務をし、昭和二〇（一九四五）年八月の終戦はアチェ州のオレレ港で迎えた。昭和二一（一九四六）年五月一八日、名古屋に復員、長野に疎開して同県警察部で英語翻訳業務に従事していた。

そこに、拓殖大学から突然要請が来た。こうして、昭和二四（一九四九）年九月の宇治の辞任で空いた大きな穴は同年一月、末永という新たな柱をもって埋められたのだった。

末永の拓殖大学在職期間は昭和二四（一九四九）年から平成四（一九九二）年までで、その間に留学生別科長や語学研究所長なども歴任した。現在は名誉教授である。拓殖大学で教鞭を執るだけでなく、NHKのインドネシア語の海外放送を担当したほか、外務省でもインドネシア語で活躍した。こうした功績が高く評価され、昭和五三（一九七八）年にインドネシア政府から文化功労賞を、平成一二（二〇〇〇）年には勲三等瑞宝章を授与されている。

末永の着任当初、それを補佐したのは、かつてマレー語従軍通訳として行動を共にした同期の藤沢秀夫（学四一期）である。藤沢が去った後は、インドネシア・マレーシア語教育界の大家であった上原訓蔵が再び拓殖大学の教壇に立った。二度目の登壇は、昭和二八（一九五三）年四月から昭和三四（一九五九）年三月までの六年間に及んだ。その頃、東京外大の蘭田顯家も拓殖大学で教鞭をとることになった。

ネイティブ・スピーカーとして教育に当たったのは、戦争賠償留学生として来日したプラナジャヤ（Pranadjaia：旧名Pranowo Joyodinoto、在職期間：昭和三九年～）とその夫人スミアトン（Sri Soemiatoen）そしてアナス・マルフ（Anas Makruf、在職期間：昭和四二年～昭和四三年）である。

インドネシア賠償研修生の受け入れ

インドネシア賠償研修・留学生の受け入れ、日本語研修所の設置は、インドネシア語教育の発展にとっても大きな意義があった。

昭和二三（一九五八）年一月に、日本はインドネシアと平和条約・賠償協定に調印、賠償研修生を受け入れることになり、昭和三五（一九六〇）年から四〇（一九六五）年までの間に、七〇〇名近いインドネシア人を国家賠償研修・留学生として受け入れた。その受け入れ大学の有力な一つとなったのが拓殖大学である。当初、賠償研修生の日本語教育は、他の国立大学で引き受けられていたが、結局、伝統的にインドネシア文化やイスラームに対する理解の深い拓殖大学が受け入れることになった。これは、拓殖大学が戦前に培った伝統である。

当時在日インドネシア大使館教育文化部長だったマルトノ氏は、そうした拓殖大学の伝統を非常によく理解し、拓殖大学への賠償研修委託を決めたという。同氏は、留学生の生活指導等にも尽力し、以後の拓殖大学の留学生教育の発展に多大な貢献をした。⁽⁸⁾

昭和三六（一九六一）年二月一日、インドネシアからの賠償

研修生に日本語を教育するための機関として、拓殖大学日本語研修所⁽⁹⁾が設置された。同年二月一四日、茗荷谷ホールに於て、賠償研修生の日本語学校入校式が挙行されて、インドネシア側からは、インドネシア大使バンバン・スゲン中將の公使マルユナニ参事官、スマルモ情報部長等が出席し、拓殖大学側からは、西郷隆秀理事長、日本語研修所の宮崎專一所長（学二四期）らが出席した。⁽¹⁰⁾ 同年五月八日までに、第一期と第二期で二三五名が入所し、研修六ヶ月後修了者は二二三名にのぼった。⁽¹¹⁾ 賠償研修生の日本語研修のために、熱心に取り組んだのは、末永晃助教授（当時）であった。⁽¹²⁾

所長の宮崎の補佐役として研修生の指導に専心したのが、後に語学研究所日本語講師に就く向井田ヒサの夫の向井田羊三郎（学二七期）であった。彼は、研修期間中に過労のために急死した。末永は後年「尊い殉職であった」と記している。⁽¹³⁾

昭和三六（一九六一）年二月以降、学内には常時インドネシア研修生があふれ、その年のインドネシア語履修者は急増した。こうした雰囲気の中で、在学中にインドネシアを訪問して見聞を広めたいと切望する学生が殺到し、グループでインドネシア親善調査団を結成するに至った。⁽¹⁴⁾

一方、インドネシア研修・留学生の受け入れの実績を基礎に

して、昭和四〇年代はじめからインドネシアとの留学生交換が始まっている。^(註) やがて、昭和六一（一九八六）年三月二十九日には、インドネシア政府派遣留学生の受け入れが開始される。^(註)

プラナジャヤ

さて、賠償研修生の一人がプラナジャヤである。プラナジャヤはインドネシアではすでに著名な声楽家で、音楽の研修のために教育文化省を通じて派遣されてきた。だが、拓殖大学で日本語教育を受けたことで、プラナジャヤの活動の場は大きく広がったといえる。というのは、当時、NHK国際局の嘱託もしていた末永の引きで、プラナジャヤはさながらインドネシアからの文化大使のようにテレビやラジオでその歌声を披露する機会を早々に得たのである。その後、NHKのインドネシア語放送も担当し、ついにはスミアトン夫人共々、拓殖大学の教壇にも立つこととなった。^(註) 帰国後は音楽財団を設立し、インドネシアの文化振興に貢献した。また、日伊文化交流に果たした功績が認められ、平成四（一九九二）年には日本政府から勲五等双光旭日章が贈られた。

この頃、拓殖大学語学研修所日本語講師としてプラナジャヤらインドネシアからの賠償研修生の教育に当たった山本隆治（学

五七期、院一期）は、その後、国際協力事業団（当時、海外技術協力事業団）の派遣で、国立インドネシア大学（当時、インドネシア外国語大学）日本語学科の客員講師などを務めた。帰国後、昭和四九（一九七四）年に拓殖短期大学マレー語・インドネシア語講師に着任した。ただ、その期間はわずか一年であった。同年のうち在インドネシア日本国大使館付属日本人学校より事務局長として招聘されたからである。現在、山本は城西大学留学生別科において留学生の日本語教育に従事している。

政経学部教授としてインドネシア・マレーシア語教育を担当しているトルセノ（Torseno）も、昭和三六（一九六一）年来日した第二回賠償留学生の一人であった。国際学友会を経て昭和四一（一九六六）年に早稲田大学商学部を卒業。その後は拓殖大学だけではなく東京外大などでも教鞭をとっている。

商学部の関伊統（学六〇期）教授は卒業後、日東貿易のジャカルタ駐在員を勤めていたが、昭和四二（一九六七）年にインドネシア・マレーシア語の専任教員として拓殖大学に招聘された。その語学力は学生時代から卓越していた、と当時の同期生たちは口をそろえている。

商学部と政経学部でインドネシア・マレーシア語を担当して

いるファリダ・イドリスノ (Farida Idrisno) は、ジャーナリストの夫と共に来日し、昭和四〇年代末、拓殖大学留学生別科で学んだ。インドネシアの教育大学 (IKIP) を卒業し、高校教員の経験もあるファリダは、人柄も成績も極めて優れていたことから、当時別科長だった末永の推薦で、別科修了後に外務省研修所のインドネシア語講師となり、拓殖大学でも教鞭をとることとなった。

戦後の拓殖大学再建期にマレー語を担当した教員の主な著作は以下の通りである。

昭和九 (一九三四) 年

- ・鳥居御嶽、藺田顯家共著編『馬來語読本―初等用』東京・海外高等実務学校

昭和一二 (一九三七) 年

- ・藺田顯家『馬來語教科書 (中等用)』海外印刷所

昭和一七 (一九四二) 年

- ・藺田顯家、宮武正道『標準マライ語講座 一』横浜商工会議所

昭和一八 (一九四三) 年

- ・藺田顯家、宮武正道『標準マレー語講座』二、三、横浜商工会議所

- ・藺田顯家『初級馬來語読本』大学書林

- ・藺田顯家『中級馬來語読本』大学書林

昭和一九 (一九四四) 年

- ・藺田顯家『時事マライ語研究』三省堂

昭和二五 (一九五〇) 年

- ・末永 晃『Pudjanga Selatan I』岡崎屋書店

昭和二八 (一九五三) 年

- ・末永 晃『Pudjanga Selatan II』岡崎屋書店

昭和三六 (一九六一) 年

- ・末永 晃『インドネシア語基礎文法』博文社

- ・末永 晃『インドネシア語基本会話』博文社

昭和四一 (一九六六) 年

・末永 晃『インドネシア語会話』柏葉社

・末永 晃『インドネシア語文法入門』大学書林

昭和四三（一九六八）年

・末永 晃『インドネシア語文例集』鳳書房

昭和五〇（一九七五）年

・末永 晃『インドネシア語会話ハンドブック』大学書林

昭和五一（一九七六）年

・末永 晃編『インドネシア語会話練習帳』大学書林

・末永 晃『インドネシア語文法入門（改訂版）』大学書林

昭和五二（一九七七）年

・末永 晃、関伊統、トルセノ・A・S『現代インドネシア語辞典』大学書林

昭和五三（一九七八）年

・末永 晃『インドネシア語分類単語集』大学書林

昭和五四（一九七九）年

・末永 晃『インドネシア語・マレーシア語の手ほどき』鳳書房

昭和五九（一九八四）年

・末永 晃『現代日本語・インドネシア語辞典』大学書林

平成三（一九九一）年

・末永 晃『インドネシア語辞典』大学書林

平成一三（二〇〇一）年

・末永 晃『日本語インドネシア語大辞典』大学書林

国際開発学部

国際開発学部でインドネシア語教育を担当している深町敬子（学六四期）は、拓殖大学がインドネシアのノメンセン大学と提携していた当時に実現した、ただ一人の交換留学生であった。昭和四〇年代初めにスマトラ島メダンのノメンセン大学と交流を深めた拓殖大学は、同大学のパルデデ学長に名誉博士号を授与、一方、拓殖大学からは末永がノメンセン大学創立一三周年記念式典に招かれた。

昭和四二（一九六七）年一〇月には第一回目の交換留学生として深町を送り出すなど、当初は順調なすべり出しだった。だが、その後、拓殖大学から留学する者はなく、またノメンセン大学側は経済的な事情から結局一人も日本に送ることができぬまま、両校関係はいつしか立ち消えとなってしまった。

ノメンセン大学大学院で理論経済学を専攻した深町は、昭和四五（一九七〇）年五月、修士学位を取得して帰国した。帰国後は、拓殖大学商・政経学部や東京農大、千葉大、外務省研修所などでインドネシア・マレーシア語の講義を行う傍ら、日本の民話をインドネシアの子供向けに翻訳するなどの文化活動にも力を注いでいる。深町の翻訳による『日本の民話』（Ceita Rakyat Jepang）シリーズは、インドネシアの大手出版社グラメディア（Gramedia）から刊行され好評を得ている。

平成一四（二〇〇二）年度より、国際開発学部には小野沢純が加わり、マレー語（マレーシア語）の授業が復活している。これは東京外大に次ぐものとして、歴史的意義がある。科目の表記は「インドネシア・マレーシア語」となっているが、マレーシア語を小野沢が、インドネシア語を深町が分離して担当する体制である。

小野沢は、昭和四〇（一九六五）年に東京外大外国語学部を

卒業。日本貿易振興会を経て、昭和五九（一九八四）年から東京外大外国語学部で教鞭をとってきた。

なお、現在、国際開発学部の地域言語の中で人気のあるのは、インドネシア・マレーシア語である。授業は週二時間、履修者は一年次、二年次とも五〇名前後である。

そのほか、昭和四〇年代から多田芳雄（在職期間…昭和四〇年～昭和四九年）が、また平成元（一九八九）年には小林寧子が拓殖大学の教壇に立った^⑧。多田は東京外大第一回の昭和七（一九三二）年卒で、ジャワの土地制度の研究も行っていた^⑨。

一方、津田塾大学大学院を経てインドネシアの国立ガジャマダ大学に留学した小林は、帰国後の昭和六二（一九八七）年、当時インドネシア科学技術評価応用庁（BPPT）からの留学生を大量に受け入れていた拓殖大学留学生別科の日本語講師に着任し、その後一時期、商・政経学部でインドネシア・マレーシア語の指導にも当たった。現在は、南山大学助教教授である。

この項に紹介した教員のインドネシア・マレーシア語関連の主な著作は、それぞれ次の通りである。

昭和五五（一九八〇）年

・関 伊統『インドネシア語会話』鳳書房

昭和五九（一九八四）年

・多田芳雄『インドネシア語の語順研究…日本語の語順との比較を出発点として生きた言葉を理解するために』エフエフ出版

平成一（一九八九）年

・Keiko Fukamachi『Mari kita belajar bahasa Indonesia』鳳書房

・小林寧子『インドネシア語を学ぼう』鳳書房

平成二（一九九〇）年

・関 伊統『インドネシア語』有明出版

平成三（一九九一）年

・小野沢純『マレーシア語常用六〇〇〇語』大学書林

平成八（一九九六）年

・小野沢純『基礎マレーシア語』大学書林

平成一一（一九九九）年

・深町敬子『すぐにつかえる日本語・インドネシア語・英語辞典』国際語学社

平成一二（二〇〇〇）年

・深町敬子『新ローマ字引き日本語・インドネシア語辞典』国際語学社

・深町敬子『すぐにつかえるインドネシア語・日本語・英語辞典』国際語学社

南洋研究の続行

紅陵大学（旧制）は、昭和二三（一九四七）年五月の学則変更申請で、海外研究としてアメリカ研究、中国研究、ソヴェエト研究、英国研究とともに南洋研究（担当…後藤友治Ⅱ学三二期）を設けた。そして、昭和二三（一九四八）年七月、新制の紅陵大学設置が申請され（昭和二四年二月認可）、外国研究として引き続き南洋研究（担当…千秋克巳）が置かれた⁽¹⁰⁾。戦前、後藤は南洋研究会で活躍、千秋は既述の通り南洋経済事情を担

当していた。これらは、戦前の南洋研究と戦後のそれとの明確な連続性を示している。とはいえ、敗戦後の日本では海外志向は急速に弱まり、かつての勢いは失われていた。

しかも、占領下において、興亜を志向するような教育は自己規制せざるを得ず、厳しい時代が続いた。それでも、海外雄飛の伝統を維持しようという意欲は残されていた。昭和二五（一九五〇）年四月の入学式で、当時の高垣総長は次のように語っている。

「今、日本は自由に外国と通商し、海外に往来する道を閉ざされているけれども、やがてそれも許される時がくる。本学の目標とするところは、そのとき、国際的友愛の精神の上に立って、敬愛される国民として、貿易その他の方法によって、渉外的事業にたずさわったり、海外に出てゆく、それに必要な研究をすることである。それによって日本の再建、世界文化の進展に寄与する、これが本学の目的であり、使命である」

昭和二六（一九五一）年九月二五日の理事会では、「特に中国、南洋、南米方面の講座を拡充し人的にも逐次増強する方針

に努力すること」が申し合わせられている。昭和二八（一九五三）年一〇月一六日の理事会では、狩野敏理事（後に理事長。学三一期）が「インドネシア調査室を設置したい」と提案している。

そして、昭和三〇（一九五五）年三月一日付で矢部貞治が拓殖大学総長に就任し、西郷隆秀理事長とともに、矢部・西郷体制が固まると、建学の精神への復帰が本格化してくる。

矢部は次のように新時代における建学の精神の復興を唱えた。

「私はこの敗戦によって虚脱と荒廃に陥っている日本国民の道義を振り起す先駆者に諸君がなられ、そしてやがてアジア民族連合の地の塩に諸君がなられる、そのような気魄をもってこの拓殖大学で学ばれるよう念願するのであります。……しかし、アジア連合とか、外地にどんどん出て行くとか、或いは日本国民の精神を刷新するというようなことは、今の段階ではまだまだ容易ではありません。故に私はこれは夢だと言ったのであります。しかしこの夢は、私は普遍妥当性を持った夢だと考えている。この夢は実現しなければならぬ。これを実現しなければ、日本の国もアジアも亡びざるを得ないのであります。その意味で、これは私の夢であるだけでなく、

拓殖大学の夢であり、日本の夢であり、アジアの夢でなければならぬ、と私は信じております」

矢部は高邁に提唱したが、総長に就任してから「アジアの夢」に不可避の語学教育を重視しなかったとも指摘されている。

末永晃は「戦後、私がマレー語を担当するようになったとき、語学の授業は週五回ありました。ところが、五回は多いから、とりあえず三回に減らそうということになってしまいました。そして、やがて週二回になってしまいました」と振り返る⁽¹⁸⁾。

海外高専構想における途上国としての東南アジア

昭和三〇（一九五五）年六月には、海外事情研究所が設立されている。さらに、一九六〇年代に入ると西郷主導で、東南アジア諸国の人材育成構想が進められた。当時、海外高専構想・国際協力育英財団構想⁽¹⁹⁾と呼ばれていたもので、もともと、自由民主党の対外経済協力特別委員会が、委員長の一万田尚登を团长とする東南アジア調査団を派遣したことに端を発している。昭和三五（一九六〇）年一月には、東南アジア教育事業調査団に矢部が取りまとめ役の一人として参加、東南アジアに対する協力施策の重点項目として、教育、技術指導の協力援助が必

要であることが認識された⁽²⁰⁾。

この構想は、戦前の南洋開発にも通ずるアジアの共栄を目指した壮大な構想であった。だからこそ、西郷構想は、小林中、植村甲午郎といった戦後の東南アジア関与の中心となった産業界のリーダーたちの支持を得ていたのではなかろうか⁽²¹⁾。

結局、西郷構想は大学内の経営基盤に対する憂慮から来る消極論もあって、実現することなく立ち消えた。だが、そのように先行していた構想にある時代認識は拓殖大学の建学の精神に直結しており、国際開発学部の創設をはじめとする後の拓殖大学の発展の過程で継承されているかにみえる。

いずれにせよ、戦後の東南アジア研究が、こうした矢部・西郷時代に再開されたのは自然な流れだったわけである。

坂田善三郎の東南アジア研究

昭和三三（一九五八）年、南洋研究が再開され、矢部の教子でもある坂田善三郎が担当することになった。昭和四一（一九六六）年には南洋研究は東南アジア研究と名称が変わったが、坂田は石橋重雄が担当するまで講義を続けている。戦後の日本における地域研究としての東南アジア研究の草分け的存在でもあった。

『昭和四四年度講義要綱』によると、坂田の講義内容は次のようになっている。

東南アジア諸国の現状と開発上の問題点について、次の基礎的な事項を取り上げて講義する。(各項毎に二―三回)

- (1) 地域研究の方法論と東南アジア地域研究
- (2) 東南アジアの自然的諸条件
- (3) 東南アジアの植民地化とヨーロッパ諸国進出
- (4) 華僑問題
- (5) 民族主義と社会主義
- (6) 農業開発と食糧、人口
- (7) 天然資源の開発と利用
- (8) 地域協力と国際関係
- (9) わが国と東南アジア

坂田は、東大法学部政治学科時代に矢部から政治学の講義を受けている^(地)。また、矢部の薦めで昭和塾に第二回生(昭和一四年四月―一五年三月)として参加した。ここで、東亜新秩序、東亜協同体を構想した近衛文麿のブレーン集団から幅広い知識を吸収するとともに、さまざまな体験をした。昭和一四(一九

三九)年、大学二年の夏休みには昭和塾主催の鮮満支旅行団に加わり、京城帝大で政治学を講じていた戸沢鉄彦に面会している。続いて戸沢の紹介で、当時奉天図書館長を務めていた衛藤利夫に面会している。衛藤からは著書を受けられるとともに、異民族統治については清の康熙帝の事績を研究するようにと教えられた^(地)。

ちなみに、旧昭和塾メンバーが主体になって、昭和二六(一九五一)年には研究団体として新時代協会を旗揚げしているが、大来佐武郎、土井章、太田通らとともに坂田も設立のための協議に参画していた^(地)。

東亜協同体の理想は坂田の胸にも刻み込まれていたようで、例えば『南洋研究』について「においても、次のように述べている。

「日本の発展は、能率的に組織されるならば、アジアの国も――資源的に恵まれていない場合でさえも――強国たりうることを示したし、また旧来の西欧の覇権が消滅しつつあることをはつきり示したのであった」

また、坂田はこの時代から「アジア解放を意図する強力な日

本により指導された汎アジア主義という理念は、一部のアジア人から支持された」とも書いている⁽⁸²⁾。

なお、東南アジア研究を教える傍ら、独協大学教授として招請されるまで、学生サークルとして歴史のあった亜細亜研究会の顧問もしていた。

石橋重雄のインドネシア研究

さて、昭和四五（一九七〇）年まで東南アジア研究の講義を担当していた坂田の後任として迎えられたのが、石橋重雄（学五六期、院一〇期）である。石橋は昭和五九（一九八四）年までインドネシア・マレーシア語教育にも当たった。またインドネシア語文献の外書講読を担当し、学生の読解力の向上に尽くした。

昭和六（一九三一）年九月に新潟県三条市に生まれた石橋は、昭和三三（一九五八）年経済学部経済学科を卒業し、大学院経済学専攻科に進んだ。在学時代には、伊東敬、和田敏雄、坂田善三郎、末永晃、西野照太郎らに師事している。特に、拓殖大学の地域研究の伝統は、伊東敬から受け継いでいる⁽⁸³⁾。

昭和三五（一九六〇）年七月から、社団法人国際情勢研究会の研究員を務めていた。昭和三九（一九六四）年七月から一年

間、スカルノ体制末期の九・三〇事件直前のジャワ島で、農村社会・経済並びにインドネシア共産党（PKI）の農村工作の実態調査および研究に従事した。

当時、世界の学界が戦後独立した発展途上国の経済開発理論が主要テーマだったことに触発され、石橋も発展途上国経済に注目するようになり、さらに東南アジアの経済開発に興味を持つようになった。次第に経済学の領域から逸脱して発展途上国の社会制度や風土に関心が移り、いわゆる地域研究の方へ入り込んでいった。当初は東南アジア地域全体が研究対象だったが、昭和三九（一九六四）年にジャカルタに留学してからは、主としてインドネシア研究を対象を絞るようになっていた⁽⁸⁴⁾。

語学と直結する地域（事情）研究を築く必要性から、末永は石橋にインドネシアをメインにした研究をするように薦めたという⁽⁸⁵⁾。

東南アジア研究の講義を担当するようになった当初、講義内容は次のようになっていた。

「まず、東南アジアがモンスーン地域であるという地理的特質を説明する。各国の概容など。次に、ヨーロッパ諸国によって形成された『植民地的経済構造』について詳述する。

とりわけ、東南アジアの産業貿易構造と複合社会経済構造にテーマをしぼり、インドネシアの状態を引用しながら、その実態と分析をおこなう。最後に、こうした東南アジアがもつ地理的・経済的特徴とわが国との経済関係についても言及する⁽⁵⁾」

平成四（一九九二）年から東南アジア研究に加えて、「東南アジア経済論」が新設され、さらに同年、政治学特講として「東南アジア政治論」が置かれた。

石橋による東南アジア経済論の内容は、以下のようになっていた。

「主要研究対象国をインドネシア共和国とし、同国の社会・経済の変容・非変容の状況について考察する。もちろん、東南アジア諸国の全般の社会・経済の共通事項についても、年度冒頭に数回講義し、東南アジアの歴史とその社会・経済構造について理解してもらう」

政治学特講（東南アジア政治論）の講義概要は、「東南アジア諸国の政治権力の特徴にふれたのち、インドネシア、スハル

ト体制の権力構造の研究、一九九二年六月実施の総選挙結果、スハルト六選およびポスト・スハルトについて分析する」となっていた。

この間、石橋は『Sekelumit sedjarah kota di Pulau Djawa: dipilih dari "Pedoman Tamasja"』(Mizuho' 一九七〇年)、『インドネシア研究：「東南アジア研究」との関連において』（表現社、一九七〇年）、『現代東南アジア』（鳳書房、一九七四年）、『変容するインドネシアの社会経済…その分析と実証的研究』（鳳書房、一九九一年）、『新講現代東南アジア』（鳳書房、一九九七年）などの優れた研究業績を残している。

現在、政経学部で東南アジア研究と東南アジア政治論は石橋の教え子の一人井上治が、東南アジア経済論は吉野文雄が担当している。また、平戸幹夫が「東アジアシステム」として東南アジア経済について講義している。

一方、平成三（一九九一）年九月二二日の理事会で示された「総長・理事長方針」で「国際交流の拡充と体制の整備」の一章が掲げられ、海外分校ネットワークの拡充が促進されているが、平成九（一九九七）年にはインドネシアのダルマ・プルサダ大学との学術交流協定を締結している⁽⁶⁾。平成十一年（一九九九年）からは同大学との間で年間一名の交換留学が実施されて

いる。これより先、昭和六三（一九八八）年三月には、マレーシア国際イスラーム大学と提携している。この提携には、サバ州政府首席大臣府イスラーム教務庁開発計画庁に勤務するなど、日本とマレーシアの友好に尽力してきた土生良樹（学五四期）が果たした役割が大きい。

さらに、国際開発学部の新設により、新たな展開が出てきているが、これについては後述したい。

三 学生の研究活動

南洋研究会の設立

大正一一（一九二二）年、予科一年南洋語に所属する学生たちが南進会を創設した。初代会長にマレー語の上原訓蔵が就き、会室貸与などの交渉に当った。昭和二（一九二七）年に卒業し、直ちにジャワに渡り、スラバヤで農園を経営した鈴木龍男（学二三期）⁽⁸⁾らが初期のメンバーということになる。

大正一三（一九二四）年には、南洋事情の木村増太郎が第二代会長に就いている。南洋研究会と改称したのは、大正一五（一九二六）年。このときに、木村は顧問となり、南洋事情の東郷實が第三代会長に、マレー語の別所直尋が副会長に、オラ

ンダ語の岡本精一が幹事に就いている。ところが、別所の死去により、昭和六（一九三一）年末には、東郷が会長を務めたまま、名誉会長に永田秀次郎学長を迎え、副会長に岡本とマレー語の宇治武夫が就いている。このように南洋研究会では、南洋事情、南洋語の教師双方から指導を受けていたことが明らかである。

ただし、南洋研究会にも所属していた末永は、当時の学生の主体性を強調して次のように語っている。

「あの頃は、現在のように複数の学校を受験するわけではなく、拓大を受けに来る者は拓大以外受けていませんから、明確な目的を持って拓大に入るわけです。しかも中国語を取った者は中国語だけに集中する。インドネシア語を取った者はインドネシア語だけ。その土地に行って、その土地の役に立つことをしたいという目的を持っていますから、言葉と事情は各自勉強しますよ」⁽⁹⁾

昭和三（一九二八）年には、研究成果を発表するために『南洋研究』を発刊している。⁽¹⁰⁾一方、この年一月には、南洋科卒業生によって、拓殖大学南洋研究会スラバヤ支部が創設されて

いる。^(四)

昭和五（一九三〇）年五月二日付の『拓殖文化』は次のように報じた。

「既に八年の古き歴史を誇る南洋研究會は昨年度の大活躍を残して其後多少沈滞の色を見せてゐたが同會委員の談を聞くに今年度の計畫としては和蘭語の特別講座は従來通り続けると共に、馬來語は新講師を聘して之が講座をも併せて設置することである」^(五)

ただし、満州情勢が注目の的となりつつある中で、活動が低調となることもあったかに見える。昭和六（一九三一）年六月二五日付の『拓殖大学新聞』は「近來不振であつた南洋研究會も本年より学一南洋語科が中心となり新しき活動に入り、組織の確立より研究室の整備、標本の備え付け、プリント発行、公開講演会等矢継ぎ早の活躍振りである」と書いている。^(六)

後に拓殖大学理事長（昭和四五年十一月～五四年一月）を務めることになる植田美與志（学二九期）は、別所の最後の教え子で、当時南洋研究会の委員として活発な活動をしており、昭和七（一九三二）年には「語学の研究、學術研究發表会に重点

を置いた活動をしたい」と語っていた。^(七)

また、当時学生の活動は極めて活発で、亜細亜研究会や阿弗利加研究会が競って活動をしていた。その分、ややもすれば各団体が対立しがちで、昭和七（一九三二）年六月には、これを解消して協力していくことで合意している。^(八)

一方、南洋研究会は、学外の学生団体にも目を向け、農大植民部と関係を持っていた。海外事情調査研究の強化のため、共同調査のための提携関係が模索されていたが、昭和七（一九三二）年一二月三日、農大の講堂で準備会が開催され、研究發表会を共同開催していくことになった。^(九)

また、昭和九（一九三四）年には慶應大学に南洋事情調査会が発足している。こうした中で、南洋研究会は、慶應、早稲田、東京外語等とも提携して研究を行う方針を示している。^(一〇)

昭和一〇（一九三五）年には、幹事に就いた飯泉良三の助力を得て、「ますます積極的に南方国策への第一歩を踏み出している」と報じられている。^(一一) この年末の『拓殖大学新聞』は次のように南洋研究会の動向を紹介している。

「南洋研究會は今を去る十有餘年前南洋熱の發達と共に生れたものにして、故別所先生、岡本先生の指導を受けて南洋

研究會各種パンフレットを發行してゐたが、滿洲事變勃發以來、世人は勿論本學々生もいやが上にも滿洲熱に煽られ南方は一時忘れられたかの觀が見えた處が國際連盟脱退により我が南洋委任統治問題、フィリッピンの獨立及土地法を初め、シンガポール軍港の近く完成するを耳にするあり、或は日蘭會商等幾多の國防的經濟的問題の勃發と共に眼は再び南方に向けられるに至り、早大に南洋事情研究會、慶應に南洋事情調査會が生れるに至つた。

本學南研は之等の事情に鑑み得意とする南洋語或はマレー語を土臺に愈々その使命を發揮して輝かしい功績を都下大學に示して居る由尚同會は本年夏會員四名迄も遠くシヤムを始め南洋に派遣して居り好評を博して居るが來年はより一層と期待されている」^(四)

すでに述べたように、昭和一一（一九三六）年八月の五相會議で「国策ノ基準」が決定され、南進論が高まりを見せる中で、南洋研究会は同年末、南洋語講習会を強化している。それまで、毎週木曜日、朝倉を招いてオランダ語会話を行っていたが、マレー語会話も開始していくことになった。^(五)

以後、南方政策が重要性を増すにつれ、活動がさらに真剣な

ものになっていったことはいうまでもない。

南洋研究の成果

南洋研究会では、『南洋研究』を發行するだけでなく、地道な研究を継続していた。彼らは、拓殖大学での講義以外にも、次のような講演会・座談会を催し、南洋事情に関する知識を深めていた。むろん、後述する通り、日本の関心が中国・滿洲に傾斜していた時代も含めて、積極的に南洋旅行に旅立っていた。

座談会・講演会

昭和四年二月三日 講演「爪哇の文明」(竹井十郎)

昭和四年五月二六日 講演「爪哇の現状」(竹井十郎)

昭和四年九月二一日

座談会(スラバヤ南国商會社・岡本景)^(六)

昭和七年四月一八日

座談会「南洋の最近の事情」

(鈴木龍男Ⅱ学二三期)^(七)

昭和七年一一月二六日

座談会「南洋の近況」「ボルネオ在住・久

慈直二(学四期)、ジャワ在住・松代幸雄

(学二五期)、アングウル在住・坪山武雄
(学二六期)等^(註)

昭和十一年五月八日

座談会「ダバオ土地問題」(只隈興三郎)^(註)

南洋研究会の研究活動が世に示されたのは、昭和七(一九三二)年のことである。この年の八月、三越で「日本民族海外発展事情展覧会」が開催され、南洋研究会は拓殖研究会、阿弗利加研究会、ロシア研究会とともに研究資料を出品したのである。花井隆彰(学三〇期)らが活躍し、移民状態の数表、南洋に於ける領有国別人口面積の比較表、最近一三年の対南洋貿易統計その他四五点を準備した。^(註)『拓殖大学新聞』は南洋研究会の出品について「多大の成果を収めた」と報じている。

当時、阿弗利加研究会など各地域研究会の活動も活発で、互いに競い合うかのように、拓殖大学関係出版物に発表している。『拓殖文化』には、南洋研究会として以下の研究成果を発表している。

「最近に於ける裏南洋事情」第一四卷第四号、昭和九年一二月

「表南洋渡航智識」第一四卷第四号、昭和九年一二月
「シヤムの商業」第一五卷第四号、昭和一〇年一二月

「英領馬來に於ける鋳業」第一六卷第三号、昭和十二年一月
「蘭領印度に於けるゴム事業」第一七卷第三号、昭和十三年一月

この間、昭和九(一九三四)年六月一三日に委員会を開催し、夏季休暇中に各委員は植民に関する研究をし、九月に研究発表会を行うことを決めた。また六月三〇日に Mrs. S. Vau West を招いて座談会を開催することを決めている。^(註)

また、昭和一一(一九三六)年四月二〇日から五月二〇日に南洋地図作成、五月二一日から六月二〇日に南洋に関する統計作成、七月七日からの一週間に南洋事情研究の整理などを行っている。^(註)

南洋研究会にも参加していた昭和八(一九三三)年卒の田伏正朔(学二九期)は、同会での発表をもとにして「南洋に於ける華僑」(『拓殖文化』第四九号、昭和五年六月)を寄稿している。また、田伏には「植民地の種々なる型」(『拓殖文化』第一二卷第二号、通卷五五号、昭和七年六月)など、東郷の影響が色濃く見られる論文がある。さらに田伏は、「南洋に於ける

「Petroleum」を三回に亘って掲載している。

『拓殖文化』には、個人の南洋研究も多数発表されている。

北川秀司(学二二期)は大正一三(一九二四)年三月に、フィリピンの独立問題について寄稿している。北川は、フィリピンを支配しながら、日本の軍国主義、帝国主義を誇大に宣伝するアメリカを厳しく批判した上で、「われ等は同じ東洋に生を享けた同じ有色人種として、比律賓が比律賓人の比律賓となつて、新に東洋の天地に一獨立國の一刻も早く、われ等の善隣として出現せん事を、何れの外國人にも譲らない同情と誠意と熱心とを以て祈願するものである」と書いている⁽⁸⁰⁾。

また早い時期のものとして、青木元治郎(学二二期)の「ポルネオの石油」がある⁽⁸¹⁾。

次のように、『拓殖大学新聞』にも南洋事情に関する多くの寄稿が見られる。

花井隆彰(学三〇期)

「対バプア島農業植民」昭和八年一月二〇日

「工業を中心として見たる蘭領東印度の現状」昭和八年一

二月二〇日

「混亂浴中の比律賓獨立運動」昭和九年一月二〇日

後藤友治(学三二期)

「日蘭會商の前途」昭和九年六月二五日

「和蘭を離れ行く蘭領東印度」昭和一〇年一月二六日

「西、葡植民時代の回想」昭和一〇年六月二〇日

「南洋移民は何故困難か」昭和一〇年一〇月二〇日

南洋への渡航

南洋研究会のメンバーは積極的に南洋に旅立った。当時、拓殖大学OBには、スラバヤ日本人会会長をはじめ現地日本人社会の中心的人物がおり、南洋に渡航する者の多くがそうしたOBを頼っていたという⁽⁸²⁾。

まず、昭和三(一九二八)年には、後に拓殖大学で教鞭をとる千秋克巳(学二五期)が堀七郎(学二五期)とともに南洋に出かけ、同年一〇月に帰国報告講演会を開催している⁽⁸³⁾。翌昭和四(一九二九)年には、四月に南洋研究会委員の初田康次郎(学二五期)が南洋協会実習生としてジャワに出発⁽⁸⁴⁾、同年六月には拓殖研究会主催の南洋見学旅行に南洋研究会の小淵紀男(学二八期)ら二名が参加⁽⁸⁵⁾、さらに同年八月には南洋研究会の大久根孟次がスマランに向かっている。

このうち小淵は、帰国後『拓殖文化』に「南洋旅行報告」を

載せている。横須賀を出発してから、船で蘭印ボルネオの北東部タラカン島やバリックに向かう経過が細かく記録されている。小淵は、東郷らの教師から多くの知識を吸収していたようで、旅行中にオランダの植民地統治の巧みさが一層切実に感じられたのは、「前々から東郷實教授を首めとし、南洋語部の教授から何回となく聴いて居た為」だと記している⁽⁸⁷⁾。

昭和六（一九三一）年四月には、南洋庁の好意により拓殖研究会旅行部主催で南洋旅行団が派遣されている⁽⁸⁸⁾。昭和七（一九三二）年七月には、南洋研究会委員の植田美與志らが南洋旅行に出かけている⁽⁸⁹⁾。この年の南洋旅行を石原廣一郎が支援したことにについては既に述べた通りである。その後南洋渡航は停滞していたが、昭和一〇（一九三五）年に四人がタイなどを訪れている⁽⁹⁰⁾。

昭和一一（一九三六）年には日本政府の南進策が固まるが、この年七月には南洋研究会の奥村隆（学三三期）と松本正君（同）が、「第二回南洋派遣」（経済政治状況視察）としてタイ・マレー半島を訪れている。この派遣は、単なる旅行とは異なり、各方面からの期待を背負っての視察という重大な使命を帯びていた⁽⁹¹⁾。

帰国後、奥村の報告が「椰子の葉」と題して『拓殖大学新聞』

に掲載されている⁽⁹²⁾。さらに奥村は、『拓殖文化』に「英領馬來經濟地理に関する一般的与件」、「英領馬來の農業⁽⁹³⁾」を書いている。

こうした大学時代の南洋研究を生かし、昭和一二（一九三七）年三月拓殖大学商学部を卒業した奥村は南洋拓殖株式会社（本店：パラオ諸島コロール島）に入社する。南洋拓殖は、昭和一一（一九三六）年七月に設立された国策会社で、東京、ヤップ、トラック、マカッサル、メナド、ゴロンタロ、ニューギニアに事務局を設け、燐鉍採掘のためにアンガウル、ファニシ、エボン、ソンソルの各地に鉍業所あるいは採鉍所を設けていた⁽⁹⁴⁾。奥村は昭和一三（一九三八）年八月にはパラオ本店勤務を命じられている。奥村の例に見られる通り、南洋研究会に参加していた学生は、卒業後南洋に雄飛し、それぞれ現地の開発に貢献している。

戦後の課外活動・啓蒙活動

主体的な学生の研究活動は、今日も消滅してはいない。戦後は、インドネシア研究会が南洋研究会を引き継ぐ形で活動を続けている。特に、インドネシア旅行には積極的で、これまでもイリアン（西パプア）関係など貴重な報告書をまとめている。

また、各研究所が主体となって、公開講座を積極的に開催し、そこで東南アジアも取り上げられている。一方、学外での啓蒙活動として、南洋協会の遺産を継承して戦後設立された社団法人日本マレーシア協会との連繋活動などを挙げることができる。同協会では、マレーシアを中心とするアジアに関する啓蒙を目的として、平成三（一九九一）年から本格的な総合セミナーを次のように毎年開催している。

拓殖大学では、このセミナーを後援するだけでなく、第四回以降毎回テーマに沿った講師を派遣するなど、学外でも東南アジア研究・教育を展開している。

第一回（平成三年六月）「環境シンポジウム」

第二回（平成四年一〇月）「マレーシアの経済・文化セミナー

（製造業の投資環境）」

第三回（平成五年一一月）「マレーシア経済・文化セミナー

（各産業分野の動向）」

第四回（平成七年一月）「アジアの共生（東アジア経済会議

構想）」石橋重雄（副学長、以下肩書きは当時）

第五回（平成七年一一月）「アジアの総合安全保障」鈴木

祐二（海外事情研究所助教授）

第六回（平成八年一一月）「イスラームと日本」飯森嘉助

（拓殖大学研究所所長）

第七回（平成九年一一月）「アジアの情報開発」高橋敏夫

（商学部長）

第八回（平成一〇月一一月）「アジアの人権」クリストファー

・スピルマン（客員教授）

第九回（平成一一年九月）「アジアの経済再生」渡辺利夫

（客員教授、現国際開発学部長）

第一〇回（平成一二年一一月）「アジアの人的ネットワーク

（留学生交流）」河田昌一郎（国際部長）

第一一回（平成一三年一一月）「アジアの環境」原嶋洋平

（国際開発学部助教授）

第二二回（平成一四年一一月）「アジアの情報戦略」平戸

幹夫（政経学部教授）

おわりに―海外雄飛の教育体制

『南進』の系譜』や『日本の南洋史観』などに示された、膨大な戦前期の資料に基づいた矢野暢の研究には、戦時期の南進論に引きずられる形で戦前期全体の南進論・南方関与を否定的

に描く論者にはない精緻さがある。矢野は、拓殖大学の南洋事情研究の土台の一つでもあった南洋協会の活動にも十分に注目し、「明治期の『南進論』のエトスを昭和時代にまで伝達するだいいな歴史的役割を果たした」と正当に評価している⁽⁸⁾。ただ、矢野は南洋協会について語るときに、その持続的な活動を支えた思想の中にも潜んでいたであろう興亜論には言及しない。そして、井上雅二に関しては「中国、朝鮮を本来の舞台とするアジア主義者が南洋と関わったユニークなケースであった」と、むしろ例外扱いするのである⁽⁹⁾。

単なる経済的動機や純学術的動機を越えて存在した興亜論と独自の植民政策論は、むしろ戦前期の南洋研究・教育の見えない原動力だったのではなからうか。その具体的な事例こそが、拓殖大学の南洋語・南洋研究であった。どの外国語学校よりも早く、日本の大学として最初にマレー語教育を開始し、当時南洋事情研究で最高水準にあった南洋協会出身の専門家による南洋事情講座を開始することができたことも、興亜論という原動力抜きには説明し難いのではなからうか。アジア全体の動向に注目する大川周明や満川亀太郎の興亜論は、南洋事情研究にも作用していたかに見える。

しかも、拓殖大学では、語学教育と地域事情研究とが連動し

て推進されていた。それも、海外雄飛、現地主義という伝統が常に意識され、興亜という明確な目標に支えられていたからであろう。

こうした戦前の輝かしい歴史と比較するとき、戦後のマレー語、東南アジア研究の体制が十分だったとはいえない。

東京外大・大阪外大はもちろん、昭和二七（一九五二）年には天理大学が外国語学部インドネシア語学科を、昭和四〇（一九六五）年には京都産業大学が外国語学部インドネシア語学科を、さらに昭和五七（一九八二）年には摂南大学が国際言語学部インドネシア語東南アジア文化コースをと、老舗ばかりか後発の大学までもが、インドネシア・マレーシア語教育に重点を置いた特色ある学科を開設していくなかで、拓殖大学はあくまでそれを第二語学の一つに留めおいたからである。

昭和五二（一九七七）年に外国語学部を設置する際にも、当初は「英米語学科（一〇〇名）、中国語学科（五〇名）、インドネシア語学科（五〇名）、スペイン語学科（五〇名）、ブラジル・ポルトガル語学科（五〇名）」という学科構成で申請することになっていたものの⁽¹⁰⁾、経営的なものを考慮して、結局は英米、中国、スペインの三学科で申請することになり、その後の展開はなかった。

また、本来ならインドネシアやマレーシアが最も必要とする人材を養成しているはずの工学部には、インドネシア・マレーシア語が置かれていない状況である。

その結果、いつしか拓殖大学のインドネシア・マレーシア語教育は、その後続々と同言語の科目を設置した三〇校を超える他大学の中に、埋没してしまっただけに見える。

末永晃は、次のように語っている。

「拓大の特徴というのは、語学別があって、その下に商学科とか経済学科とかがあったわけです。私が教務の責任者をやっていたとき、文部省関係から来た東大の先生あたりが、よく『昔の拓大のあのやり方は画期的で非常によろしかった』⁽⁸⁾と言っていました」

敗戦によって失われたものはあまりに大きく、占領体制の拘束によって縛られた部分もある。そうした時代に生き残るのは極めて困難なことではあったが、拓殖大学の特色を薄めていった傾向があるとの指摘は少なくない。

だが、ようやく国際開発学部⁽⁹⁾の設置によって、建学の精神にふさわしい体制が回復されつつあるかに見える。

拓殖大学・南洋語（インドネシア語等）及び南洋（東南アジア）研究の系譜

東南アジア研究に関しては、小野沢純が「インドネシアと日本」、「インドネシア国際関係論」などを、岩崎育夫が「マレーシア政治・経済論」、「シンガポール政治・経済論」などを、安田靖が「タイ政治・経済論」などを、吉野文雄が「ASEAN論」などを、梶原弘和が「インドシナ政治・経済論」などを、篠塚徹が「インドネシア経済論」、「インドネシア政治論」などを講義する体制が整えられた。また、インドネシア・マレーシア語教育が強化されるとともに、ベトナム語やタイ語などアジアの言語の講座も新たに設けられた。

こうした講座も、建学以来の南洋語・南洋研究の歴史を理解することによって、さらに建学の精神にふさわしいものとして発展していくに違いない。

※拓殖大学関係者の敬称は略させていただいた。

〈注〉

- (1) 『東洋協会専門学校学則変更認可願』明治四〇年九月二〇日、國史館臺灣文獻館所蔵。これまでの定説では、東京外大が最初に馬來語教育を開始したとされていたが、今回新たに発見された同認可願によって拓殖大学が最初であったことが判明した。但し、明治四〇年九月に変更された学則の運用が明治四一年四月からだとなれば、東京外大とほぼ同時期ということになる。注(58)参照。

- (2) 『東京外国語大学史』一九九九年、一〇三四頁。
- (3) 『天理大学五十年史』一九七五年、五五頁。
- (4) 『台湾協会会報』第二二号、明治三二年六月二〇日、八〇頁。
- (5) 鶴見佑輔『後藤新平』第二卷、勁草書房、一九六五—一九六七年、四一二頁。
- (6) 拓殖大学創立百年史編纂室編『台湾論』拓殖大学、二〇〇二年七月に収録。
- (7) 『東洋時報』大正二年五月二〇日。
- (8) 原覺天『現代アジア研究成立史論・満鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究』勁草書房、一九八四年、四五頁。
- (9) 矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社、一九七九年（中公新書）、一〇二頁。
- (10) 『南洋協会二〇年史』南洋協会、昭和一〇年、五一六頁。
- (11) 前掲、一四四頁。
- (12) 前掲、三三〇頁。
- (13) 前掲、三五八頁。
- (14) 前掲、三三一—三三二頁。
- (15) 拓殖大学百年史編纂室編『新渡戸稻造—国際開発とその教育の先駆者』拓殖大学、二〇〇一年、二〇七—二〇九頁。『台湾時報』第八二号、大正五年七月。
- (16) 『南洋協会二〇年史』三三四—三三五頁。
- (17) 前掲、一八九—一九〇頁。
- (18) 『東洋時報』大正五年二月二〇日。
- (19) 山本哲朗「東亜経済調査局付属研究所 通称『大川塾』『みんなみ』」二八号、平成九年三月三十一日、四頁。
- (20) 『東洋時報』大正八年四月二〇日。
- (21) 『東洋』大正一二年九月。
- (22) 『東洋』大正一三年一月。
- (23) 『東洋』大正一四年六月。
- (24) 『東洋』大正一四年九月。
- (25) 『東洋』昭和三年二月。
- (26) 『東洋』昭和五年六月。
- (27) 『東洋』昭和五年七月。
- (28) 『東洋』昭和六年七月。
- (29) 『東洋』昭和八年一月。
- (30) 『東洋』昭和一〇年八月。
- (31) 梅屋については、車田讓治『国父孫文と梅屋庄吉 中国に捧げたある日本人の生涯』六興出版、一九七五年などを参照。
- (32) 『現代アジア研究成立史論』六六頁。
- (33) 草原克豪「解題に代えて 新渡戸稻造・後藤新平・拓殖大学」（拓殖大学創立百年史編纂室編『新渡戸稻造—国際開発とその教育の先駆者』拓殖大学、二〇〇一年、三二五頁）。
- (34) 『現代アジア研究成立史論』八二頁。
- (35) 拓殖大学出版部編『植民講話』二松堂書店、大正八年。
- (36) 『東洋時報』大正六年二月二〇日。
- (37) 拓殖語学校に関しては、クリストファー・W・A・スピルマン「拓殖語学校・海外拓殖学校に関する資料」『拓殖大学百年史研究』第四号、二〇〇〇年三月。
- (38) 東亜同文会、南洋協会、東洋協会、南亞公司のほか、井上は次の団体に参与している。
昭和ゴム、東洋拓殖株式会社、ダバオ開拓、アフガニスタン協会、インドネシア協会、人口問題研究会、日伯協会、日土協会、日墨協会、日亞協会、ラテンアメリカ中央会、日タイ協会、比律賓協会、日希協会、満州移住協会、秘露綿花株式会社、朝鮮中央会、井上民族政策研究所、

海外高等実務学校、海外植民学校。

- (39) 荒尾精に関しては、佐藤垢石『荒尾精…興亜の先驅者』鱗書房、昭和十六年（興亜人物傳叢書）、小山一郎『東亜先覺荒尾精』東亜同文會、昭和十三年などを参照。井上雅二も、『巨人荒尾精』（大空社、一九九七年復刻）を著している。
- (40) 実際、井上は東亜会の幹事として明治三一（一八九八）年に北京を訪れた際、在京中であつた龍溪と会見している。井上雅二『南進の心構へ』刀江書院、昭和十六年五月、三四―三五頁。
- (41) 永見七郎『世界を股にかけて…井上雅二氏の前半生』日本植民通信社、昭和七年、五〇八―五〇九頁。
- (42) 『南進の心構へ』二六二―二六三頁。
- (43) 『日本の南洋史観』九五頁。
- (44) 前掲、八九頁。
- (45) 『東洋』昭和十五年一月。
- (46) 『拓殖大学新聞』昭和七年一月二〇日、第五九号。
- (47) 『南洋協会二〇年史』一二〇頁。
- (48) 山室信一『思想課題としてのアジア…基軸・連鎖・投企』岩波書店、二〇〇二年、五四七―五四八頁。
- (49) 徳川義親『じゃがたら紀行』郷土研究社、昭和六年。
- (50) 徳川義親、朝倉純孝『馬來語四週問』大学書林、昭和十二年。
- (51) 石原は、現地住民への配慮を欠いた日本の軍政の在り方を批判している。清水元「石原広一郎における『南進』の論理と心理」（正田健一郎編『近代日本の東南アジア観』アジア経済研究所、一九七八年）一〇二―一〇三頁。
- (52) 『東洋』昭和十六年七月。
- (53) 『東洋』昭和十六年一〇月一日。
- (54) 『東洋』昭和十八年七月一日。
- (55) 武富正一『馬來語大辭典』歐文社、昭和一七年。
- (56) 『東京外国語大学史』一二三、一〇三四頁。
- (57) 第一部は東洋協会専門学校内に、第二部は韓国京城の分校内に設置。
- (58) 前掲『東洋協会専門学校学則變更認可願』明治四〇年九月二〇日。但し、認可願では、「露語、マレー語、蒙古語」は「未定」と書かれている。明治四一年三月の『東洋協会専門学校規則』には「隨意科として露語 マレー語 蒙古語ヲ教授スルコトアルヘシ」と謳われている。
- (59) 『学友会報』大正五年一一日。
- (60) 『拓殖大学学則』大正八年。
- (61) 『拓殖大学要覧』大正八年。
- (62) 上原訓蔵によると、ウォンチはマレー半島で巡査部長をしていた。「拓殖大学に於けるインドネシア語」五一頁。
- (63) 末永晃「日本に於けるインドネシア語教育」『海外事情』一九六八年一月、五一頁。
- (64) 『南洋協会二〇年史』三三七頁。
- (65) 『拓殖大学一覽』昭和五年、昭和九年。
- (66) 東京外大は明治四四（一九一一）年三月に東洋語速成科を廃止して、本科に馬來語科を加えたが、馬來語科は昭和二〇（一九四五）年まで隔年入学であつた。したがって卒業も、第一期が大正三（一九一四）年、第二期が大正五（一九一六）年となったわけである。
- (67) 『拓殖文化』昭和二年一〇月二八日、三〇号。
- (68) 『拓殖大学新聞』昭和六年七月二〇日、第五四号。
- (69) 前掲。
- (70) 末永晃聞き取り、二〇〇二年二月九日。
- (71) 「日本に於けるインドネシア語教育」五三頁。
- (72) Soebagjo I. N. ed. Mr. Sudjono — Mendarat dengan Pasukan Jepang di Banten (Jakarta, 1983)。

- (73) 『藤原繁先生追悼集』藤原繁先生追悼集刊行委員会、一九七九年、四二頁。
- (74) 工藤尚子「日本・インドネシアの文化交流史―日本におけるインドネシア語教育の発展を事例として」(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科二〇〇〇年度修士論文)。
- (75) 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア…一九三〇年代「南進」の論理・「日本観」の系譜』勁草書房、一九八六年、二五二頁。
- (76) 前掲、二五二―二五三頁。
- (77) 末永晃聞き取り、二〇〇二年一月一日。なお、本稿作成に当っては、末永晃名誉教授のほか、特に以下の方々のご協力をいただいた。浅間久幸・荒木光彌・石橋重雄・稲川義郎・小野沢純・工藤尚子・小林寧子・深町敬子・山本隆治。(アイウエオ順、敬称略)
- (78) スジヨノは昭和十三年に東京外国語学校マレー語教師に着任し、在日インドネシア留学生団体「サレカット・インドネシア」の会長に就いた。スジヨノがジャワ貴族の称号「ラデン」を冠する名前であるように、当時のインドネシアからの留学生には家柄の良い者が多かった。
- (79) 『拓殖大学一覽』昭和五年。
- (80) 『南洋協会二〇年史』一九三頁。
- (81) 末永晃「序文」拓殖大学創立百年史編纂室編『岡本精一―インドネシア・ムルデカ(独立)の源流』拓殖大学、二〇〇二年、ii頁。
- (82) 『拓殖大学一覽』昭和五年、昭和七年。
- (83) 末永晃聞き取り、二〇〇二年一月一日。
- (84) 『拓殖大学一覽』昭和一八年。
- (85) 『みんなみ』第九号、一九八三年八月二五日。
- (86) 大川周明『復興亜細亜の諸問題』中央公論社、一九九三年(中公文庫)、四二頁。
- (87) 「魂の会」については、大塚健洋「拓殖大学『魂の会』について」『拓殖大学百年史研究』一・二合併号、一九九九年三月、七九―八九頁。
- (88) 『復興亜細亜の諸問題』三六九頁。
- (89) 拓殖大学集団未来編『叛逆の神話…反体制右翼の構築へ』島津書房、一九七四年、一三六―一四〇頁、森本武志証言、井上治著『日本人指導官の意識と行動…ジャワ防衛義勇軍』鳳書房、一九九五年。なお、別班には回教班が置かれ、治集団司令部からは『全ジャワ回教状況調査書』などが発行された。
- (90) 田中のイスラーム関連主要著作は、拓殖大学百年史編纂室編『田中逸平―イスラーム日本の先駆』二〇〇一年に収められている。
- (91) 東亜経済調査局附属研究所に関しては、大塚健洋『大川周明 ある復古革新主義者の思想』中央公論社、一九九五年、一七〇―一七四頁など。
- (92) 『現代アジア研究成立史論』四六〇頁。
- (93) 棕木瑳磨太「雲煙の彼方」ぎょうせい、二〇〇〇年、三〇六―三〇七頁。同書には、大川塾誕生に至る詳しい経緯も書かれている。
- (94) 西村清人「塾・寮の生成と学統」『拓殖大学百年史研究』第五号、二〇〇〇年七月、一七七頁。
- (95) 棕木瑳磨太講述「大川周明を語る」『拓殖大学創立百年史編纂室シリーズ』第三号、二〇〇〇年七月二〇日、一二頁、「雲煙の彼方」、一五三頁。
- (96) 山本哲朗「東亜経済調査局付属研究所 通称『大川塾』『みんなみ』二八号、一九九七年三月三一、二頁。
- (97) 逆瀬川澄夫「我青春に悔い無し」『みんなみ』二九号、一九九八年九月二〇日、五一頁。
- (98) 山本哲朗「大川先生をしのぶ」『みんなみ』二七号、一九九六年一月一〇日、一〇頁。
- (99) 前掲、九頁。
- (100) 『東洋』昭和五年八月掲載。

- (101) 『東洋』昭和九年七月掲載
- (102) ともに、『満川亀太郎―地域・地球の啓蒙者』下巻に収録。
- (103) 「興亜学塾関係資料」(拓殖大学創立百年史編纂室編『満川亀太郎―地域・地球事情の啓蒙者』上巻、四三五―四四〇頁)。
- (104) 田中正明『アジア独立への道』展転社、一九九一年、一〇一―一〇二頁。
- (105) 昭和四年四月、規模・設備の拡大をはかり海外拓殖語学校と改称。
- (106) 「拓殖語学校・海外拓殖学校に関する資料」。
- (107) 戦中には大阪商大興亜経済研究室、関西学院大学産業研究所東亜経済研究室、京都帝大東亜経済研究所、東京商大東亜経済研究所、東京帝大南方資源研究会、山口高商東亜経済研究所、神戸商業大学東亜研究所、長崎高商東亜経済研究所などの教育機関が南方調査にあたった。一九四〇年代以前に、これらの教育機関にどの程度の調査研究の蓄積があったかを研究し、日本の高等教育機関全体における拓殖大学の南洋研究の占める位置を考察することも今後の課題である。
- (108) 「拓殖大学学則改正ノ件認可申請」(昭和十二年一月一九日)、「同認可書」(昭和十三年二月三日)。
- (109) 『拓殖大学一覽』昭和九年。
- (110) 『南洋協会二〇年史』三四四頁。
- (111) 前掲、二六五頁。
- (112) 木村増太郎『支那南洋に対する企業貿易論』巖松堂、大正十二年、一七三頁。
- (113) 木村増太郎「我国民経済の根基」『拓殖文化』第七号、大正十三年一月、六頁。
- (114) 木村増太郎『東亞經濟政策』千倉書房、昭和十五年、八―九頁。
- (115) 『拓殖大学一覽』によると東郷の担当は「植民政策」となっているが、『拓殖文化』では「南洋事情」の担当とされている。
- (116) 『南洋協会二〇年史』三三二頁。
- (117) 『拓殖文化』昭和二年五月一九日、二六号。
- (118) 東郷實『植民夜話』岩波書店、一九二六年、二五三―二八〇頁。米ノックス大学準教授のマイケル・A・シュナイター氏は、新渡戸稻造と大川周明と東郷實の植民政策学を比較分析し、三者相互の相違点と三者に共通する文化的アプローチ等について論じている。Michael A. Schneider, "Colonial Policy Studies in a Period of Transition - Nitobe Inazo, Okawa Shumei and Togo Minoru at Takushoku University -", 『拓殖大学百年史研究』第三号、一九九九年九月、(1)―(28)頁。
- (119) 東郷實『精神日本の建設―農村問題と教育』玉川學園出版部、一九三九年(教育革新叢書四)、三二頁。
- (120) 『拓殖大学新聞』昭和十一年七月二〇日、第一〇六号。
- (121) 『南洋協会二〇年史』九二頁。
- (122) 『東洋』第四五年第一〇号、昭和十七年一〇月一日。
- (123) 細野軍治に関しては、細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」『拓殖大学百年史研究』二〇〇一年一月参照。
- (124) 昭和三十一年以降、インドネシア語。『履修要綱』昭和三十一年。
- (125) 「日本に於けるインドネシア語教育」五四頁。
- (126) 石井米雄監修『インドネシアの事典』同朋舎、一九九一年、三〇六頁。
- (127) 南方特別留學生は、昭南興亜訓練所やマラヤ興亜訓練所とともに、東南アジアのエリート的民族の覚醒に大きな役割を果たした。坪内隆彦『アジア復権の希望マハティール』亜紀書房、一九九四年、六六頁参照。
- (128) 末永晃『日本語インドネシア語大辞典』二〇〇一年八月三〇日あとがき。
- (129) 末永晃「インドネシア語生の出征」『海外事情』一九六一年四月、二五―二九頁。

- (130) 『日本語インドネシア語大辞典』あとがき。
- (131) 本人の記憶による。インドネシア大使館で賞の正式名称等の確認を試みたが、この時代の記録はないとのことであった。
- (132) こうしたマルトノ氏の功績を称えるため、昭和六〇（一九八五）年五月二五日の理事会において同氏（当時インドネシア国内移住担当大臣）に名誉博士号を授与することが承認された。『理事会議事録』一九八五年五月二五日。
- (133) 昭和三八（一九六三）年四月に語学研修所に改称。さらに昭和四七（一九七二）年一〇月に語学研究所に改称。
- (134) 末永晃「インドネシアと拓殖大学」『海外事情』一九七〇年十一月、三六―三七頁。
- (135) 工二仁「インドネシア共和国政府派遣賠償研修生を受け入れた拓殖大学」『拓殖大学百年史研究』六号、八三頁。
- (136) 末永晃「インドネシア研修生を迎えて」『海外事情』一九六一年四月号、二四―二九頁。『世界に天駆けた夢と群像 拓殖大学百年・小史』二〇三頁。
- (137) 末永晃「記念号発行に寄せて」『語学研究』第二四号、一九八〇年一〇月、四頁。
- (138) 「インドネシアと拓殖大学」三七頁。
- (139) これに合わせて、同様の条件での台湾（国際商業専科学校）との留学生交換も開始。
- (140) 『理事会議事録』一九八六年三月二九日。
- (141) Cendrawati Suhartono ed. Saat Melangkah Bersama Pranadajaja-Sebuah Biografi oleh Sri Soemiatoen Pranadajaja (Jakarta, 2000, p. 87)。
- (142) 多田は、国立国会図書館アジア・アフリカ資料室との兼任。
- (143) 訳書に、ヘスリング著『爪哇及びマドゥラに於ける土地及びその関係事項』東亜研究所、一九四一年がある。
- (144) 『拓殖大学百年史 部局史編』五五頁。
- (145) 末永晃聞き取り、二〇〇二年一月一日。
- (146) 海外高専構想・国際協力育英財団構想に関しては、坪内隆彦「理事会関係文書に見る国際貢献」『拓殖大学百年史研究』第九号、二〇〇二年三月、八二―九三頁。
- (147) 拓殖大学調査課編「東南アジア諸国留学生教育の現状―主として問題の所在について」一九六一年八月。
- (148) 小林と植村は、昭和二九（一九五四）年に吉田茂首相の指示で設置された賠償審議会のメンバーでもあった。また、小林は後に財団法人アジア経済研究所に発展する東南アジア開発五人委員会のメンバーでもあった。
- (149) 坂田善三郎「東大時代の矢部先生」『海外事情』一九六二年一〇月、三四頁。
- (150) 前掲、三七頁。
- (151) 昭和塾に関しては、室賀定信『昭和塾…弾圧の嵐の中でも自由の灯を守りつづけたひとつの塾があった』日本経済新聞社、一九七八年、一五八頁。
- (152) 坂田善三郎『南洋研究』について『海外事情』一九五七年八月、五一頁。
- (153) 石橋重雄「解題」拓殖大学創立百年史編纂室編『岡本精一―インドネシア・ムルデカ（独立）の源流』拓殖大学、二〇〇二年、二九―一頁。
- (154) 石橋重雄「最終講義要旨―インドネシアのSARA問題について」『政治・経済・法律研究』第四卷第三号、拓殖大学政治経済研究所、二〇〇二年三月、八三頁。
- (155) 末永晃聞き取り、二〇〇二年一月一日。
- (156) 『昭和四五年講義要綱』二七頁。

- (157) 『理事会議事録』一九九一年九月二二日。
- (158) 『理事会議事録』一九九七年九月一八日。一九九六年三月一八日に一度締結されたが、インドネシア側事情により再締結。
- (159) 鈴木は『熱帯栽培事業論』『拓殖文化』第一〇号、大正一四年一月などを寄稿している。
- (160) 末永晃聞き取り、二〇〇二年一月一日。
- (161) 『南洋研究』第二号、一一七頁。なお、『南洋研究』のうち、現在所在が確認できているのはこの第二号と第一一号のみである。第二号には岡本精一「東印度に於ける回教傳播の由来」が、第一一号には同著「南洋を題材とした小説に就て」が掲載されている。両論文は、前掲『岡本精一—インドネシア・ムルデカ（独立）の源流』の補遺として『拓殖大学百年史研究』第一〇号、二〇〇二年七月に収録されている。
- (162) 前掲、一一八頁。
- (163) 『拓殖文化』の昭和五年五月二二日、第四八号。
- (164) 『拓殖大学新聞』昭和六年六月二五日、第五四号。
- (165) 「日本に於けるインドネシア語教育」五〇頁。
- (166) 『拓殖大学新聞』昭和七年五月二〇日、第六二二号。
- (167) 『拓殖大学新聞』昭和七年六月二〇日、第六三三三号。
- (168) 『拓殖大学新聞』昭和七年二月二〇日、第六八八号。
- (169) 『拓殖大学新聞』昭和九年五月二三日、第八二二号。
- (170) 『拓殖大学新聞』昭和一〇年五月二〇日、第九三三三号。
- (171) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年二月二〇日、第一〇〇〇号。
- (172) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年二月二〇日、第一一〇〇号。
- (173) 『南洋研究』第二号、一一八頁。
- (174) 『拓殖大学新聞』昭和七年四月二〇日、第六一〇号。
- (175) 『拓殖大学新聞』昭和七年二月二〇日、第六八八号。
- (176) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年五月二〇日、第一〇四号。只限は、ダバ
- オに三〇年滞在し、マニラ麻の経営で有名。
- (177) 『拓殖大学新聞』昭和七年九月二〇日、第六五五号。
- (178) 『拓殖大学新聞』昭和九年六月二五日、第八三三三号。
- (179) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年五月二〇日、第一〇四号。
- (180) 北川秀司「比律賓の独立運動と米国の領土的野心」『拓殖文化』第五号、大正一三年三月、八二頁。
- (181) 『拓殖文化』への学生の寄稿文については、池田憲彦『「拓殖文化」・学生の寄稿文に見る「アジア世界の保全」(その一)』『拓殖大学百年史研究』第六号、二〇〇一年一月、一〇〇—一四二頁。
- (182) 後藤は、昭和九（一九三四）、昭和一〇（一九三五）年に南洋研究会委員長を務めている。
- (183) 末永晃聞き取り、二〇〇二年二月九日。大正二年頃より、『拓殖大学学友会報』には、南洋在住のOBの便りが頻繁に載るようになっていく。末永晃の記憶によれば、昭和一八年頃には三〇〇—四〇〇名の出身者が各地で生活していたらしい。
- (184) 『南洋研究』第二号、一一八頁。
- (185) 前掲、一一八頁。
- (186) 前掲、一一八頁。
- (187) 「南洋旅行報告」『拓殖文化』第四五号、昭和四年一〇月、一一七一—五二頁。
- (188) 『拓殖大学新聞』昭和六年五月二〇日、第五二二号。
- (189) 『拓殖大学新聞』昭和七年七月二〇日、第六四四号等。
- (190) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年六月二〇日、第九四四号。
- (191) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年七月二〇日、第一〇六号。
- (192) 『拓殖大学新聞』昭和一一〇年九月二〇日、第一〇七号。
- (193) 『拓殖文化』第一六卷第二号、昭和一一〇年二月掲載。
- (194) 『拓殖文化』第一七卷第一号、昭和一二二年七月掲載。

- (195) 「奥村隆氏（学部三三期）・小深田貞雄氏対談―戦時の南洋拓殖株式会社を語る」『拓殖大学創立百年史編纂室シリーズ』第二二号、二頁。
- (196) 矢野暢『南進』の系譜』中央公論社、一九七五年、七七頁。
- (197) 前掲書、一二三頁。
- (198) 『理事会議事録』一九七五年六月一七日。
- (199) 末永晃聞き取り、二〇〇二年二月一日。

あとがき

本稿は当初、南洋語それもインドネシア語に重点をおいて、井上治講師によって資料的にまとめられていた。その原型は広澤明彦講師のまとめた「拓殖大学史におけるスペイン語教育の位置付けについて・試論」〔『拓殖大学百年史研究』第六号、二〇〇一年一月〕であった。

井上講師の草稿は本誌八号に掲載する予定で校正も完了していた。

しかし、本稿でも紹介した、「語学と地域研究は連動している方が良い（後進の石橋重雄への忠告）」との末永晃先生の指摘に基づいて、再検討することになった。

そこで、井上稿を活用しつつ、地域研究としての南洋（東南アジア）研究が近現代の拓殖大学を中心においてどのように展

開を経たかを、包括的に坪内隆彦編集委員にまとめてもらった。なお、リタイアされて後も健在でインドネシア語辞典に取り組んでおられる末永晃先生、本年三月に退任されて現在は名誉教授であられる石橋重雄学友には、本稿作成に支援されたことを感謝したい。

末永先生の聞き取り記録は、坪内委員の手によりまとめられて、いずれ拓殖大学百年史の南方についての断面記録として報告されるであろう。戦時中に学徒出陣が制度化される前に、志願して昭南（シンガポール）にある第二五軍司令部に通訳として採用され、後に、当時もオランダ勢が中に入らず秘境と見られ、インドネシアとして独立した以後から現在も、ジャワ人の介入を拒んでいる、独特のイスラーム信仰にあるスマトラの西端アチェに派遣されて入隊し、戦後の一年も含めて三年も駐留した体験は、脇で拝聴していて、淡々とした語り口であるがために、一層に説得力があった。原住民の信頼が厚かった人柄が偲ばれる貴重な足跡である。

（主幹・池田憲彦）